館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第41集

松沼町遺跡発掘調査報告書

MATUNUMA－TYOU

多々良沼公園整備事業に伴う発掘調査報告書

2005

館林市教育委員会

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第41集

松沼町遺跡発掘調査報告書

MATUNUMA – TYOU

多々良沼公園整備事業に伴う発掘調査報告書

2005

館林市教育委員会

序

多々良沼の近くで発見された、松沼町遺跡の発掘調査が終わり、ここに報告書がまとまりました。

館林市の西部に位置する「多々良沼」は、館林市の豊かな自然を代表する市民の憩いの場所で、春から秋にかけては太公望達の魚釣りやレジャーの場所として、また、市民の自然散策の場所として、冬から春にかけては、冬の使者である白鳥が遠く北の国から来訪する場所として知られています。

「多々良沼」の歴史は古く、今をさかのぼる12万年以上前にこの地を川が流れており、その窪地に水がたまったものともいわれております。沼の東側には馬の背状の高台が南北を連なり、赤松の林が広がっています。これは、日本最古で最大の「内陸古砂丘」で、その起源は当時の川が運んだ砂であるといわれております。

また、伝説によれば、今からおよそ千年前の万寿2年（1025）に、この沼の水が製鉄に適するとして、「宝日向」なる者が、この地で製鉄を始め、その名前から「タタラ」と「ヒナタ」の地名が生れたと伝えられています。実際に、多々良沼桟橋の近くでは現在も鉱滓（製鉄でタマハガネをとった屑）が拾え、その伝説を裏付けるものと考えられています。

「多々良沼」は植物の宝庫でもありました。明治38年（1805)、この地で発見された「ムジナモ」は大正9年（1920）国の天然記念物として指定され、その姿は昭和26年頃までみられました。

そのほか「タタラカンガレイ」と呼ばれる「多々良」の名前の付いた植物の発見などもありました。

現在も周囲に広がる赤松林は、防風林として冬の強風から街を守ってくれているとともに、館林市を代表する自然の中をジョキングや散歩を楽しむ市民の姿も少なくありません。

今回、「多々良沼」の東側の内陸古砂丘の一部で、炭焼窯などの遺構が発掘されました。

「踏鞴製鉄」には大量の炭が必要で、炭焼窯の発見は、これまで伝説とされてきた「多々良」の存在を裏付けるものとして貴重な発見ということができます。

遺跡は今、一部が埋め戻され、多々良沼の自然を生かした「多々良沼公園」として生まれ変わろうとしております。

長い歴史が示すように、周りの住民に親しまれ、利用されてきたこの「多々良沼」に、また一つの新しい歴史が付け加えられたことに、おおきな喜びを感じます。

発掘調査にあたられた皆様や関係者の皆様のご苦労とご努力に深く感謝申し上げ序といたします。

平成17年3月

館林市教育委員会

教育長　大塚文男

例　　言

1. 本書は群馬県の計画した「多々良沼公園整備事業」にともない、平成14～15年度に実施した「松沼町遺跡」の発掘調査の結果をまとめた発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は群馬県から依頼を受け、館林市教育委員会が実施したものである。
3. 調査・整理・報告書作成の期間は次の通りである。

　①事前確認調査　　平成14年9月3日～平成14年9月6日
　　平成14年11月27日～平成14年11月29日（群馬県教育委員会実施）
　②詳細確認調査　　平成15年7月3日～平成15年7月23日（館林市教育委員会実施）
　③本発掘調査　　平成15年10月20日～平成16年2月20日（館林市教育委員会実施）
　④整理・報告書作成　平成16年12月1日～平成17年3月31日（館林市教育委員会実施）

4. 調査組織等

　詳細確認調査・本発掘調査・整理報告書作成に伴う組織は館林市教育委員会で組織した。

　教　育　長　大塚文男
　教育次長　早川勝敏（平成14年度まで）　三田正信（平成15年度から）
　担　当　課　館林市教育委員会　文化振興課
　課　　長　中村慎六
　係　　長　阿部　博
　学　芸　員　岡屋英治（副担当）　阿部弥生　原　幸恵
　主　　事　打木洋輔（担当　平成15年度まで）　釜島美貴（経理担当）　吉田紋乃
　　吉村昭和（担当　平成16年から）

5. 作業員

　調査及び整理に携わった作業員は下記のとおり。

　石井悦雄　坂田岩吉　高瀬　広　小林俊彦　大澤平八郎　吉村昭和　堀越峰之　吉田敏雄
　三田雅俊　高野宜秀　田中陽子

6. 報告書の編集ならびに執筆は岡屋英治と吉村昭和が担当した。
7. 調査によって出土した出土遺物、調査記録、調査資料は館林市教育委員会で保管をしている。
8. 発掘調査ならびに報告書作成にあたり、諸氏、諸機関にご指導、ご協力をいただきました。

　飯森康広　市橋一郎　川原秀夫　車崎正彦　黒澤照弘　澤口　宏　杉山真二　前沢和之　矢口裕之
　群馬県都市公園事務所　館林土木事務所　群馬県教育委員会　館林市史編纂センター

〈目　　次〉

序
例　　言
目　　次
図版目次
写真目次

第　1　章　松沼町遺跡の環境 …… 1
　第1節　地理的環境 …… 1
　第2節　歴史的環境 …… 3

第　2　章　調査に至る経過 …… 5
　第1節　遺跡発見にかかる経緯 …… 5
　第2節　確認調査の内容 …… 7

第　3　章　調　査　の　内　容 …… 11
　第1節　各遺構の内容 …… 11
　　1）　第1号炭窯跡 …… 13
　　2）　第2号炭窯跡 …… 16
　　3）　抜根穴跡 …… 19
　第2節　出土遺物 …… 21
　　1）　土器 …… 21
　　2）　石器 …… 27
　　3）　炭化材 …… 28
　第3節　松沼町遺跡の性格 …… 29
　第4節　「製鉄」との関連性 …… 31

写真図板 …… 34
参考文献 …… 39
抄　　録 …… 40
奥　　付

〈 図 版 目 次 〉

第 1 図　位置図・地形図 …… 2
第 2 図　周辺の遺跡 …… 4
第 3 図　群馬県教育委員会による確認調査遺構確認図 …… 6
第 4 図　館林市教育委員会による確認調査遺構確認図 …… 8
第 5 図　本調査区域全体図 …… 12
第 6 図　第1号炭焼窯跡　平面および断面図 …… 14
第 7 図　第2号炭焼窯跡　平面および断面図 …… 17
第 8 図　抜根穴跡配置図 …… 20
第 9 図　出土遺物実測図 …… 22
第10図　出土遺物実測図および拓影（1） …… 24
第11図　出土遺物実測図および拓影（2） …… 25
第12図　石器実測図 …… 27
第13図　松沼町遺跡全体遺構配置図 …… 30
第14図　周辺の製鉄関係の遺跡等 …… 32

〈 写 真 目 次 〉

写　真　1　遺跡遠景 …… 5
写　真　2　調査風景1 …… 7
写　真　3　調査風景2 …… 7
写　真　4　遺構確認状況（3トレンチ） …… 9
写　真　5　遺構確認状況（8トレンチ） …… 9
写　真　6　確認された遺構（炭焼窯跡） …… 10
写　真　7　確認された遺構（炭焼窯跡） …… 10
写　真　8　確認された遺構（土坑） …… 10
写　真　9　確認された遺構（土坑） …… 10
写　真 10　調査風景1 …… 11

写　真 11　調査風景２ …… 11
写　真 12　第１号炭焼窯跡　土層断面 …… 13
写　真 13　第１号炭焼窯跡　炭化材出土状態 …… 13
写　真 14　調査風景 …… 15
写　真 15　第１号炭焼窯跡　完堀状態 …… 15
写　真 16　第２号炭焼窯跡　土層断面 …… 16
写　真 17　第２号炭焼窯跡　遺構確認状態 …… 16
写　真 18　調査風景 …… 18
写　真 19　第２号炭焼窯跡　完堀状態 …… 18
写　真 20　抜根穴跡① …… 19
写　真 21　抜根穴跡② …… 19
写　真 22　多々良沼と松沼町遺跡 …… 29
写　真 23　多々良沼遺跡近景 …… 31
写　真 24　出土遺物①（No.1） …… 35
写　真 25　出土遺物②（No.2～No.6） …… 35
写　真 26　出土遺物③（No.7～No.8） …… 36
写　真 27　出土遺物④（No.9～No.13） …… 36
写　真 28　出土遺物⑤（No.14～No.16） …… 36
写　真 29　出土遺物⑥（No.17～No.20） …… 36
写　真 30　出土遺物⑦（No.21～No.26） …… 37
写　真 31　出土遺物⑧（No.27～No.33） …… 37
写　真 32　出土遺物⑨（No.34～No.39） …… 37
写　真 33　出土遺物⑩（石１～石６） …… 37
写　真 34　炭化材①　横断面 …… 38
写　真 35　炭化材①　放射断面 …… 38
写　真 36　炭化材①　接線断面 …… 38
写　真 37　炭化材③　横断面 …… 38
写　真 38　炭化材③　放射断面 …… 38
写　真 39　炭化材③　接線断面 …… 39

第Ⅰ章　松沼町遺跡の環境

第1節　地理的環境

館林市は、関東平野の北辺、「鶴舞う形」に形容される群馬県の「鶴の頭」の部分、つまり群馬県の東南部に位置する市域約60k㎡、人口約8万人の地方都市である。

首都圏からの距離は60kmほどで、東武鉄道「浅草駅」から特急電車で1時間、東北自動車道で都心から1時間半ほどの距離であるとともに、群馬県の県庁所在地である前橋市までは約50kmの距離にある。

市の北側を渡良瀬川が、邑楽郡明和町を隔て南側を利根川が東流しており、市域はこの両大河に挟まれるようにしてある。標高は市域の最高地で36mほど、最低で約16mと低く、内陸部でありながら、低地帯の様相を呈している地域である。

市域のほぼ中央部には標高20m前後の「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地が東西に延び、この低台地は西から東に向いて緩かに傾斜している。

洪積台地を取り囲むように、利根川・渡良瀬川に連なる中小河川の氾濫原である沖積地（低地）が広がっており、その標高は18～16mほどである。

市域の中央部に邑楽・館林台地を深く浸食して東流する「鶴生田川」が、台地の北側の沖積地には「矢場川」が、南側の沖積地には「谷田川」が東流し、これら3つの河川に合流する、中小河川の谷頭が洪積台地に深く入り込み、台地の縁辺部は樹枝状を呈している。

また、これら河川の谷頭には大小の湿地が形成されることが多く、その大きなものは池沼となっている。「多々良沼」「城沼」「茂林寺沼」「近藤沼」などの沼は、この中小河川の谷頭に形成された沼で、周囲には広い湿地帯を伴っており、館林の景観を特色付けている。

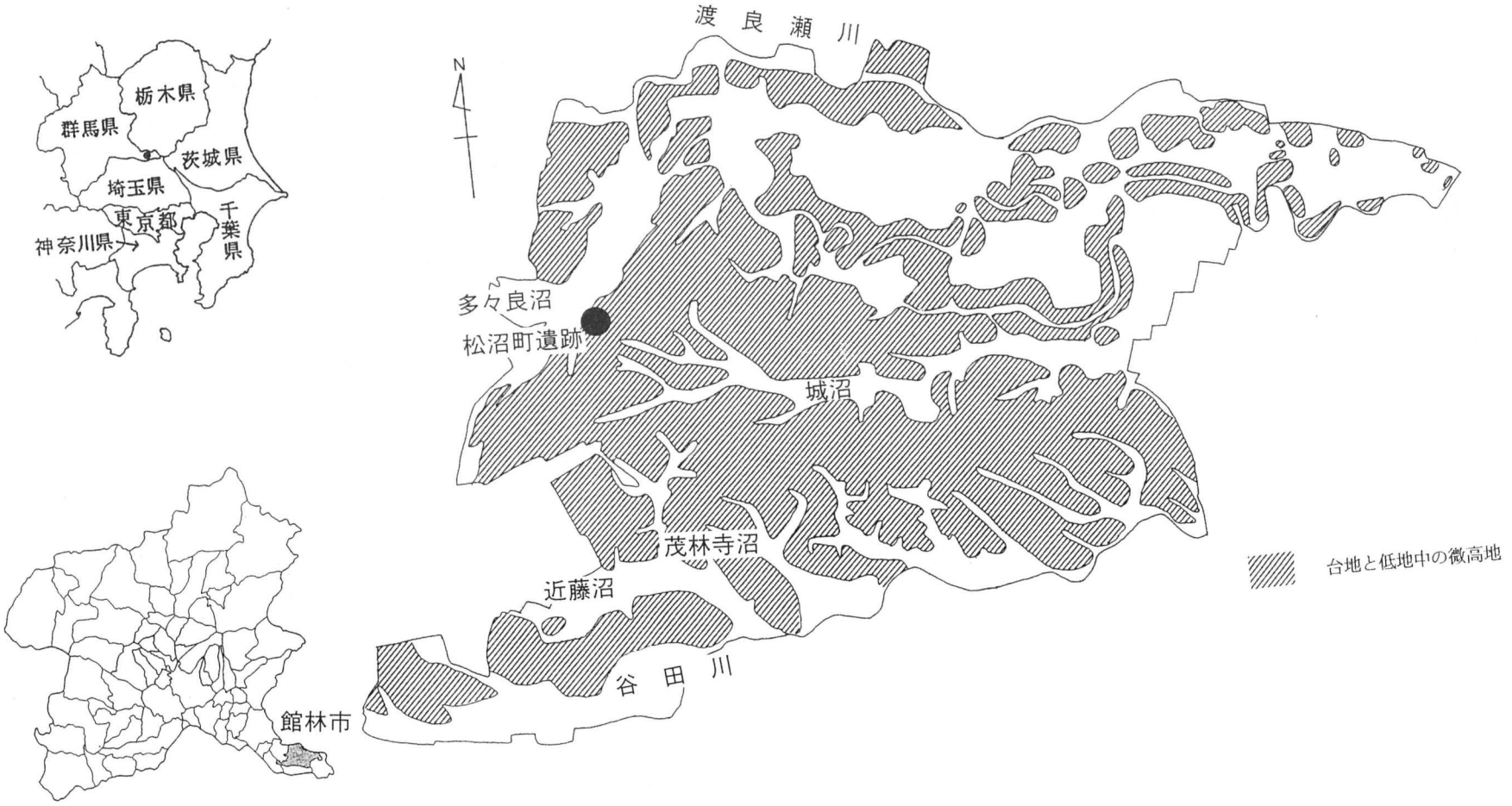
松沼町遺跡は、東武鉄道小泉線成島駅の北方約800mのところで平成14年に新しく発見された、縄文時代から中世にかけての遺物が確認できる遺跡で、その中心は炭焼窯を主体とした生産遺跡である。

遺跡は、「多々良沼」を北西に望み、多々良沼の南東岸に沿って南北に延びる馬の背状の台地が多々良沼に向けて落ち込む北西斜面の中腹に立地しており、現在の標高は約23m、周辺低地（多々良沼）との比高差は約2mである。

「多々良沼」は館林市の西部に位置し、旧河川の河道と思われる低地帯に所在する市内最大の沼で、その西岸は邑楽町に接するが、現水面のほとんどは館林市に属している。

多々良沼の所在する旧川道は、大泉町古海から館林市高根町まで続く溝地帯で、その東側には「内陸古砂丘」や「埋設河畔砂丘」と呼ばれる馬背状の台地が連なっている。この埋設河畔砂丘は、中部ローム下に厚い砂層が堆積しており、標高は30～36m程、低地帯の館林市にあっては最も標高の高い場所となっている。

遺跡周辺の眺望はすばらしく、「多々良沼」全体を見渡すことができるばかりか、冬の厳寒期には、遠く西に「浅間山」を望むことができる。


栃木県
群馬県
茨城県
埼玉県
東京都
千葉県
神奈川県
館林市
N
渡良瀬川
多々良沼
松沼町遺跡
城沼
茂林寺沼
近藤沼
谷田川
台地と低地中の微高地

第１図　位置図・地形図

第2節　歴史的環境

次に多々良沼を中心に、時代別に本遺跡周辺の遺跡を遺跡地図から見てみたい。市域は現在の館林市と邑楽郡邑楽町にまたがる。

多々良沼北東側

沼の北東岸には、旧石器時代の山神脇遺跡（22館林市）、縄文時代～古墳時代の集落である高根・外和田遺跡（25館林市）、縄文土器や土師器が確認される小蓋林遺跡（21館林市）、梅木山遺跡（23館林市）、古墳時代の墳墓が確認されている高根古墳群（24館林市）、奈良～平安時代の新倉前遺跡（15館林市）、二ツ塚遺跡（26館林市）、平安時代の日向新田遺跡（18館林市）のほか、中世の製鉄にかかる生産址とされる多々良沼遺跡（19館林市）、中世城館跡の高根城跡（25館林市）などが所在する。

この地域の地形は、多々良沼に続く低地帯と沼の北側にある低台地、沼の東に連なる埋設河畔砂丘に分けられる。多々良沼遺跡（19）、日向新田遺跡（18）は、沼北側の低台地上に、その他は埋設河畔砂丘上に所在する。

多々良沼南東側

沼の南東岸には、縄文時代の遺物が確認できる上絹屋遺跡（20館林市）、北小袋遺跡（34館林市）、縄文時代、古墳時代、平安時代の遺物が確認される近藤障子遺跡（32館林市）、伝右ェ門遺跡（33館林市）、小袋遺跡（35館林市）、二本松遺跡（31館林市）が、古墳時代の墳墓としての富士嶽神社古墳（37館林市）、平安時代の遺跡とされる妙円寺1遺跡（27館林市）、妙円寺2遺跡（29館林市）、牛島遺跡（28館林市）、諏訪北遺跡（30館林市）、中島遺跡（36館林市）などが所在する。

この地域の地形は埋設河畔砂丘に続く広い洪積台地（低台地）にあたる。上絹屋遺跡（20）のみ埋設河畔砂丘に位置する。

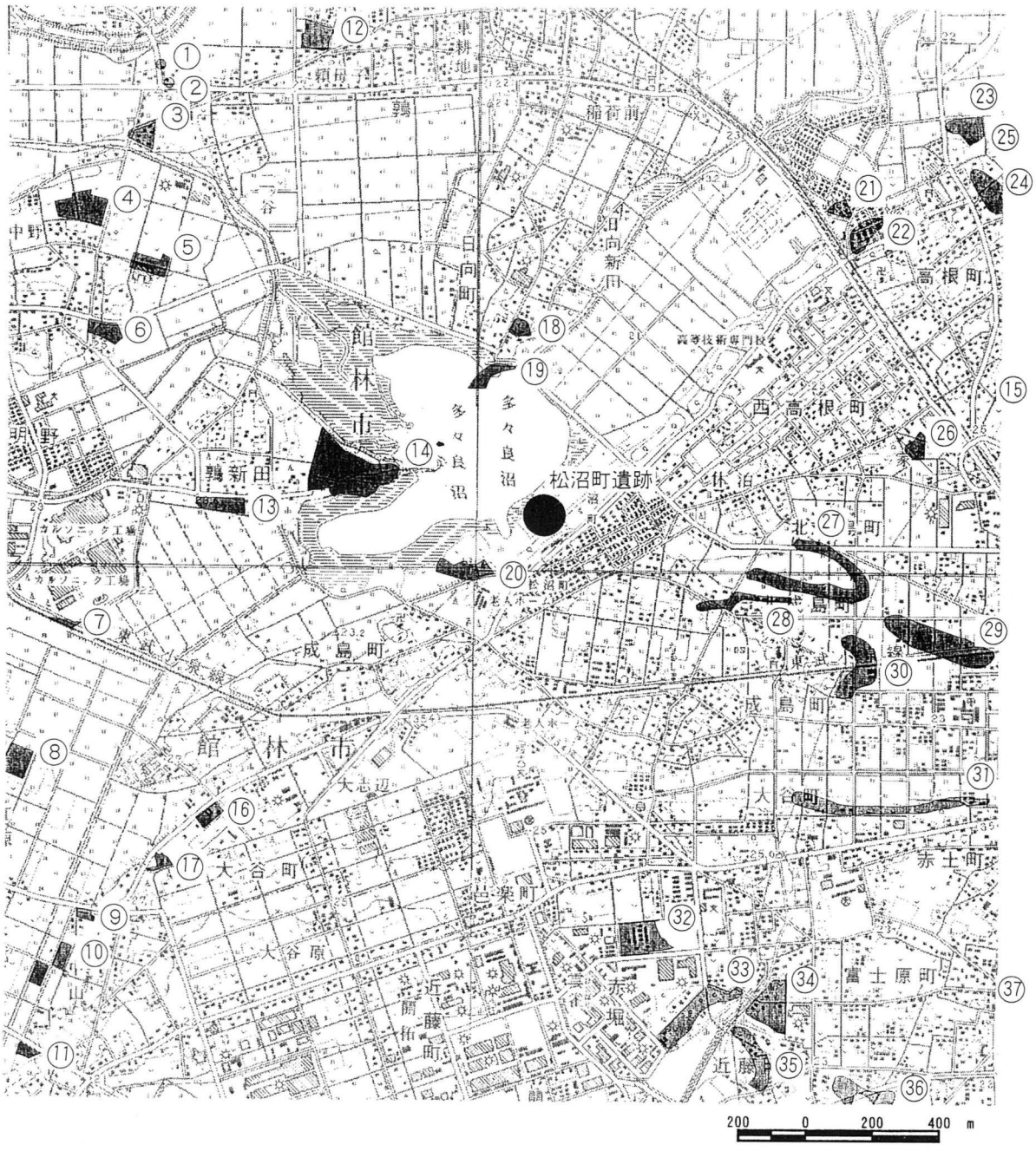
多々良沼南西側

沼の南西岸には、旧石器時代の遺物を出す水溜第一地点遺跡（17館林市）、水溜第二地点遺跡（16館林市）、縄文時代の遺物を散布する子々五遺跡（7邑楽町）、縄文時代や古墳時代の遺物が確認できる中山遺跡（9邑楽町）、古墳時代の遺物を出す目車遺跡（10邑楽町）、宿遺跡（11邑楽町）、江原遺跡（8邑楽町）などが分布している。この地域の地形を外観すると、沼から南に延びる低地帯と沼西側の低台地、沼東岸の埋設河畔に分けられ、水溜第一、第二地点遺跡（17、16）中山遺跡（9）、目車遺跡（10）、宿遺跡（11）は埋設河畔砂丘上、江原遺跡（8）、子々五遺跡（7）は西側の低台地に位置している。

多々良沼北西側

沼の北西側には、縄文時代の遺物を散布する曼荼羅遺跡（6邑楽町）、下中野縄文遺跡（4邑楽町）、縄文時代や古墳時代の遺物を出す恩林寺前遺跡（12邑楽町）、古墳時代の散布地である内之原遺跡（13邑楽町）、下中野土師遺跡（5邑楽町）、雷電神社遺跡（3邑楽町）、また古墳時代の墳墓として雷古墳（1）、雷2古墳（2）が確認され、さらに、中世城館跡の鶉小城（14邑楽町）がある。

この地域の地形は、沼西側に広がる低台地の部分にあたる。確認されている遺跡のいずれもが、この台地上に所在している。



①雷古墳
②雷２号墳
③雷電神社遺跡
④下中野縄文遺跡
⑤下中野土師遺跡
⑥曼陀羅遺跡
⑦子々五遺跡
⑧江原遺跡
⑨中山遺跡
⑩目車遺跡
⑪宿遺跡
⑫恩林寺前遺跡
⑬内之原遺跡
⑭鶉小城
⑮新倉前遺跡
⑯水溜第二地点遺跡
⑰水溜第一地点遺跡
⑱日向新田遺跡
⑲多々良沼遺跡
⑳上絹屋遺跡
㉑小蓋林遺跡
㉒山神脇遺跡
㉓梅木山遺跡
㉔高根古墳群
㉕高根城跡・高根外和田遺跡
㉖二ツ塚遺跡
㉗妙円寺１遺跡
㉘牛島遺跡
㉙妙円寺２遺跡
㉚諏訪北遺跡
㉛二本松遺跡
㉜近藤障子遺跡
㉝伝右エ門遺跡
㉞北小袋遺跡
㉟小袋遺跡
㊱中島遺跡
㊲富士嶽神社古墳

第２図　周辺の遺跡

第２章　調査に至る経過

第１節　遺跡発見にかかる経緯

松沼町遺跡は、遺跡台帳（館林の遺跡）に登載された周知の包蔵地ではない。

遺跡発見にかかる経緯は、平成11年群馬県より、多々良沼東岸に多々良沼公園整備の計画が策定されたことによる。この時点において、整備計画敷地内には、上絹屋遺跡と多々良沼遺跡が含まれることが確認されており、これらの遺跡については、公園整備のなかで、現地はそのままの形態で現状が維持、保存されることが確認できたが、本遺跡は周知の遺跡ではなかったことから保存の対象にはなっていなかった。

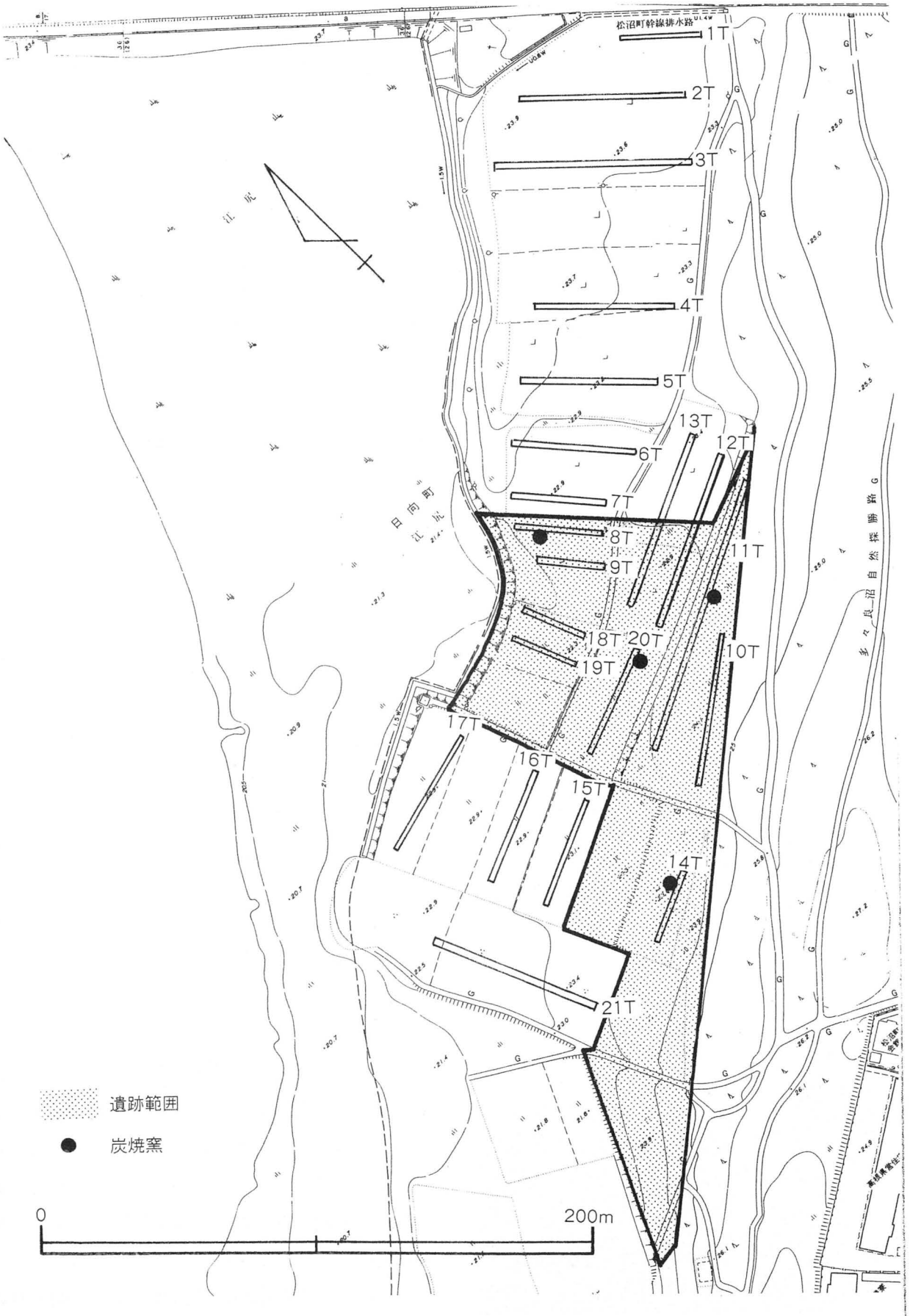
平成14年度になって、計画敷地内の埋蔵文化財の有無について事前に確認をする確認調査が、群馬県教育委員会によって実施された。この確認調査において、本区域から4基の炭焼窯跡と思われる遺構が確認され、製鉄に関わる炭焼窯などを主体とした生産遺跡である可能性が確認された。

こうしたことから、平成15年１月「遺跡発見の届出」がなされ、遺跡名は所在する松沼町から「松沼町遺跡」として遺跡台帳登載をおこなった。

こうした経緯を経て「松沼町遺跡」は周知の遺跡となり、公園整備計画に伴って、その取り扱いを協議されることとなった。公園整備計画のなかで、本遺跡周辺は自然観察センターを中心とする自然観察エリアの中に含まれており、湿生植物園に伴う水路やビジターセンター、公園管理などの設備等の設置が計画されていた。

平成14年度に群馬県教育委員会によって行われた確認調査では、遺跡の存在は確認できたものの遺跡の詳細までを把握することができなかったことから、遺跡保存の協議のための遺跡のより詳細な情報を得るための詳細確認調査が、平成15年度館林市教育委員会において行われた。

写真１　遺跡遠影



第３図　群馬県教育委員会による確認調査遺構確認図

第２節　確認調査の内容

ここで群馬県教育委員会と館林市教育委員会がおこなった確認調査の内容をまとめておきたい。

1）群馬県教育委員会による確認調査の内容

群馬県教育委員会による確認調査は、事業計画地内の遺構の有無、遺物の有無を確認するために実施されたもので、その経過については前述の通りである。

調査は敷地買収と耕作物との関係から、平成14年９月と11月の２回に分けて実施された。

９月の調査においては、計画区域の北側を中心に、巾1.5mの試掘溝（トレンチ）13本を設定し、重機により掘削を行い遺構検出面の認定、遺構の有無の確認、遺物の出土の確認がおこなわれた。

この検査において、８号試掘溝において平成時代の炭焼窯跡と推定される遺構１基、11号試掘溝において平安時代の炭焼窯跡と推定される遺構１基が確認された。このほかにも各トレンチにおいて、比較的新しい時代のものと考えられる土坑や溝などが確認された。

11月の調査においては、計画区域の南側を中心に、巾1.5mの試掘溝（トレンチ）８本を設定し、重機により掘削を行い遺構検出面の認定、遺構の有無の確認、遺物の出土の確認が行われた。

この調査において、14号試掘溝、20号試掘溝ににて平安時代の炭焼窯跡がそれぞれ１基確認されたほか、各試掘溝にて土坑が、19号試掘溝において縄文時代前期の土器片が確認された。

二回の確認調査の結果、遺跡の範囲は炭焼窯跡などの確認された範囲を中心に、館林市松沼町706－12、706－13の一部、706－14の一部、706－15、707－2、707－3の６筆、合計11,844㎡として、遺跡発見の届出を行い、「松沼町遺跡」として遺跡台帳への登載を行うとともに、その取扱いについて公園整備計画との調整をおこなうこととなった。

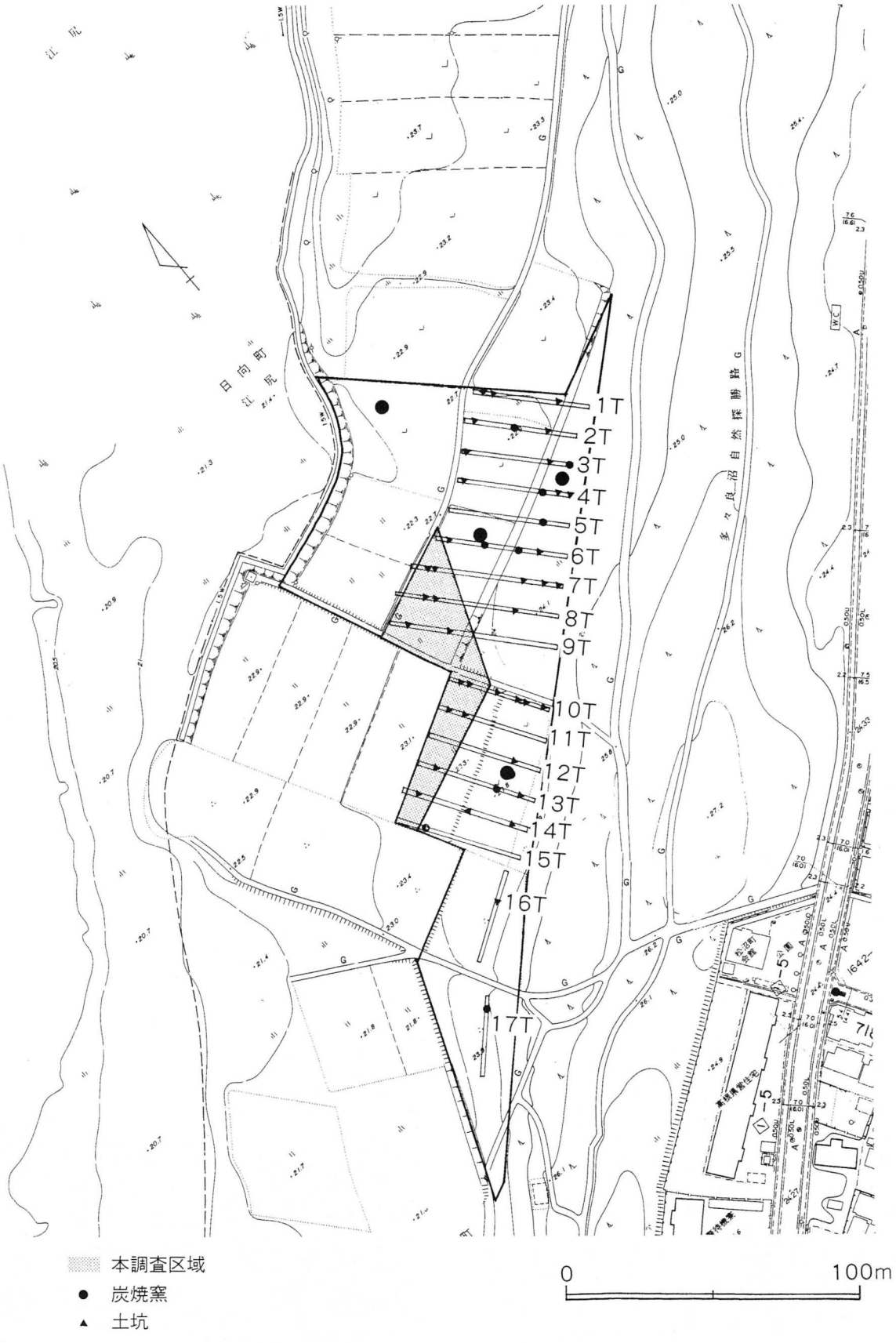
写真２　調査風景１

写真３　調査風景２

群馬県教育委員会の確認調査の結果をうけ、事前に多々良沼公園整備事業に伴う埋蔵文化財の取扱い及び今後の対応について、群馬県教育委員会文化課、群馬県都市公園事務所、館林市公園緑地課、館林市教育委員会の間で協議がおこなわれ、松沼町遺跡の取扱いについて今後の方針が話し合われた。

協議のなかで、公園整備計画はすでに工事の詳細まで決まっており、遺跡保存のための更なる盛土は難しい状況が確認されたことから、現設計のなかで遺構などの現地保存のできない部分の記録保存を図ることとし、工事や調査の調整などの関係から、記録保存のための本調査については館林市教育委員会で実施することとなった。

現設計段階での掘削が遺構面に及ぶ範囲の確認や調整、記録保存のための調査範囲の確認や調整、



第４図　館林市教育委員会による確認調査遺構確認図

また、記録保存に係る本調査経費などの積算にあたり、現状の群馬県教育委員会による確認調査の結果からでは非常に大雑把になる可能性があった。

こうしたことから、これに対応するためには遺跡内での遺構配置の状況や数量、確認面の深さなどの情報をより詳しく知る必要があり、館林市教育委員会で再度、詳細な確認調査を行うこととなった。

2）館林市教育委員会により詳細確認調査の内容

次に館林市教育委員会で実施した詳細確認調査の結果をまとめておきたい。

館林市教育委員会では、上記内容を踏まえ群馬県土木部都市公園課及び工事担当部署である館林土木事務所と協議をおこなうとともに、設計図の提供を受け、群馬県教育委員会の確認調査の精度を高めるとともに、公園整備計画との調整をはかるためのデータを集積するための詳細確認調査を行った。

調査は、遺跡の範囲において、これまでに試掘溝が無かった部分や、建物の建設や切土などがおこなわれる部分を中心に、10mに1本の割合で試掘溝17本を設定し、重機により掘削するとともに断面、平面の状況観察を行い遺構などの確認をおこなった。

調査は平成15年7月に実施し、この調査によって古代～中世のものと考えられる9基の炭焼窯跡（内1基については群馬県教育委員会の確認調査にて確認済み）、時期は不明であるが、土坑37基が確認され、炭焼窯とこれに伴う工房などの遺構の可能性が考えられた。

また、遺構面までの深さについては、多少の高低はあるものの、平均して現在の地表面より20cm程であることがわかった。

調査を通し、保存対象となる地番およびその面積は館林市松沼町706－12、13の一部、14の一部、15、同707－2、3の6筆、11,844㎡となった。

この詳細確認調査の結果をもとに、再度、群馬県土木部公園課、館林土木事務所と協議を行い、現状保存

写真4　遺構確認状況（3トレンチ）

写真5　遺構確認状況（8トレンチ）

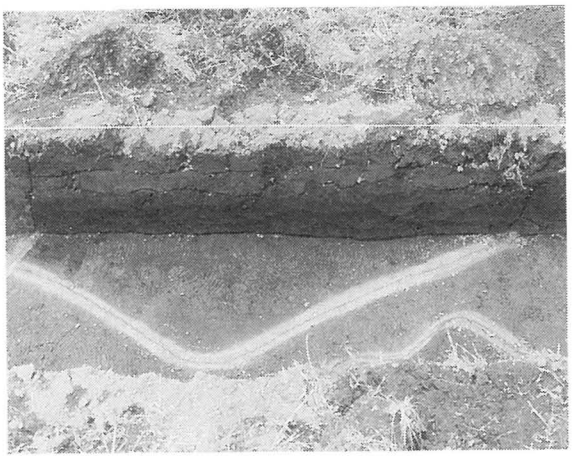


写真６　確認された遺構（炭焼窯跡）

写真７　確認された遺構（炭焼窯跡）

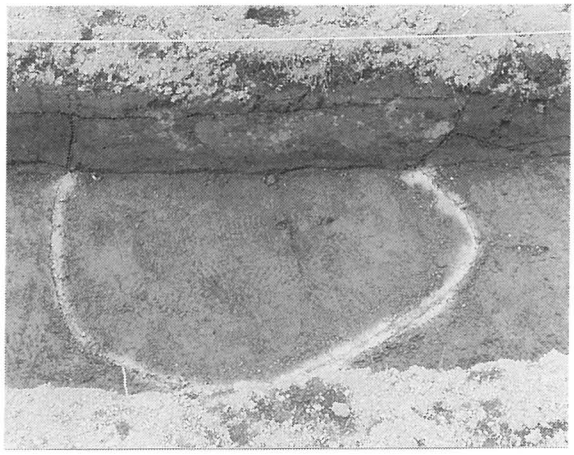


写真８　確認された遺構（土坑）

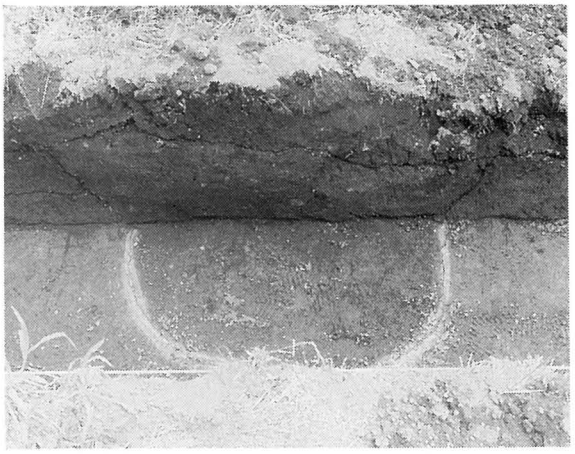


写真９　確認された遺構（土坑）

のできない開発区域の記録保存の本発掘調査を行うことで合意された。

平成15年7月30日付けで土木工事のための発掘通知が、館林土木事務所から提出され、9月12日付けで群馬県より館林市教育委員会に本発掘調査の依頼が提出された。

開発予定区域のうち、保存対象面積11,844㎡、このうち、盛土などにより現状保存をはかることのできる面積が10,468㎡であったことから、記録保存のための本調査を行う面積を1,367㎡とし、10月9日に協定書がかわされ、10月14日付けで委託契約を締結、10月20日から本調査を開始した。

第3章　調査の内容

第1節　各遺構の内容

調査は整備計画のなかで、「水路」や「池」となるための切土を伴い現地保存できない部分を対象に行われた。

本調査を実施する区域は、保存対象区域のほぼ中央から北側にあたる部分で、遺跡地のでは沼よりにあたり、その地番は松沼町706－14の一部、15の一部、707－3の一部、面積は1,367㎡である。

調査区はちょうど三角形を二つあわせたような形をしており、中央の畦であった部分を境に、便宜上、東区と西区に分けた。

平成15年に行われた館林市教育委員会での確認調査では、本調査の対象区域内には土坑と考えられる遺構が11基確認されていたが、確認調査ではトレンチ（試掘溝）の間隔が10m毎であったことを考慮すると、土坑はその一つの規模が小さいため、確認できないものがかなりの数あるものと予想させるとともに、炭焼窯跡についても、これまでの確認調査によって遺跡範囲のなかで全域に及ぶ範囲で群在していることから、本調査部分においても新しく検出される可能性が高いことを予想させた。

表土はバックホウを使用し、調査区全面の表土の排土を行い、その後、人力により精査し、遺構の検出に努めた。

本調査区域において確認された遺構は、東区で炭焼窯跡1基、土坑27基、西区で炭焼窯跡1基、土坑37基、合計で炭焼窯跡2基、土坑64基である。

炭焼窯跡については、調査区全体でみると区域の南よりに位置し、土坑は調査区全体に散らばって分布していた。

炭焼窯跡については、群馬県教育委員会、館林市教育委員会のどちらの確認調査時のトレンチにかかっておらず、本調査によって初めて検出したものである。

調査区は、南から沼側（北側）に向けて、緩やかに傾斜しており、比較的高い部分では耕作土層の下は直ぐにローム層となっていたが、調査区の北側の沼よりでは耕作土の下に暗褐色土の土層が見られ、縄文土器の破片などが出土している。

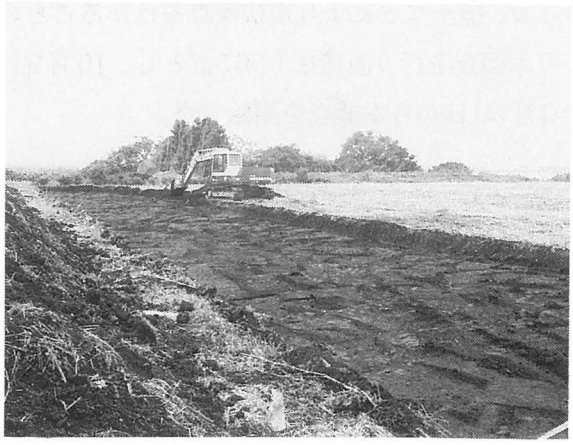


写真10　調査風景1

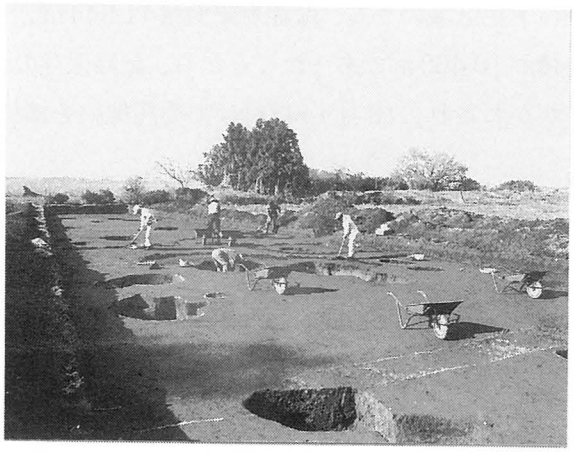
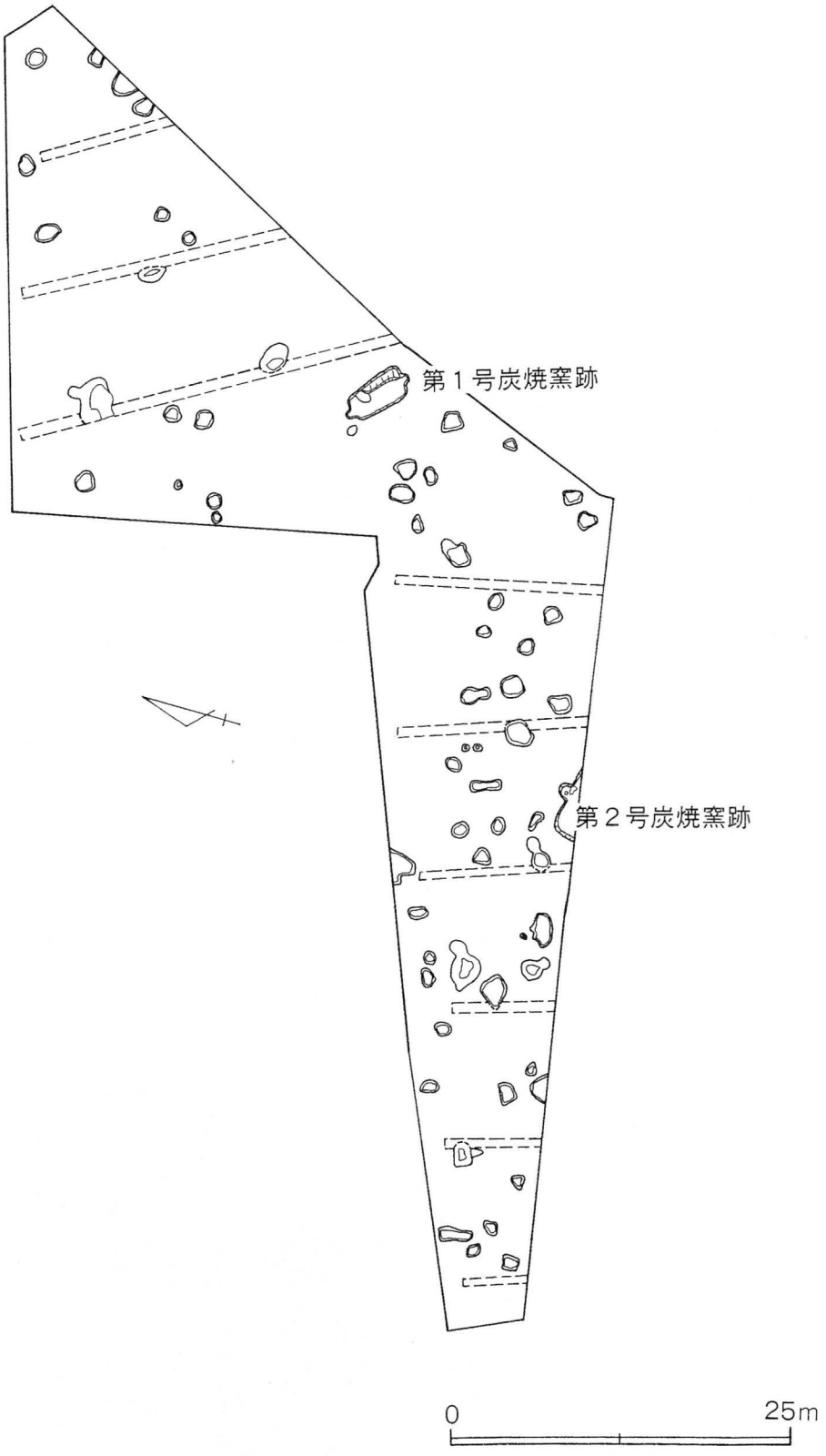


写真11　調査風景2



第５図　本調査区域全体図

1）第1号炭焼窯跡

第1号炭焼窯跡は、本調査区の東区の中央南よりで検出された。

確認面はローム面である。確認時の平面プランは楕円形であった。

規模は、長径441cm、短径272cmを計る。深さは最深で確認面より42cmを計る。

主軸はN－50°－Sを示す。

平面形は角のやや張った小判型を呈し、谷下側が幾分狭くなる。主軸方向は、調査地の地形に対してほぼ並行しており、沼に向かう方向にある。

長軸方向両側壁（東壁、西壁）の中央部に、50cm×50cm程の楕円形の突出部が付き、全体の形状は軍配状を示す。

床はロームでほぼ平ら、踏み固められた痕跡は無い。北東角よりやや東によった壁下に80cm×80cmほど皿状の落ち込みが確認されている。

壁は緩やかに立ち上がる。北壁中央から東壁角にかけて、一段のテラス状の段を有する。

覆土は、大きく3層に分けられ、

第①層：黒褐色で多量の焼土とカーボン粒子を含んでいる。

第②層：暗褐色土で焼土粒子、カーボン粒子を混入する。

第③層：明褐色土でローム粒子多量混入。カーボン粒子混入している。

土器などの出土は見られなかったが、窯内には多量の炭が残されていた。特に東側突出部、北側テラス脇には多量の炭がまとまって出土している。

炭化材の検出状態は横倒しの状態であった。

長軸上にある南北の突出部は、風向きを考慮すると、北側が焚口、南側が煙出口であろうと考えられる。

多量の炭化材が横倒しのままで出土していうことを考慮すると、炭焼きの過程などでの何らかの支障などが起きたことを予想させる。

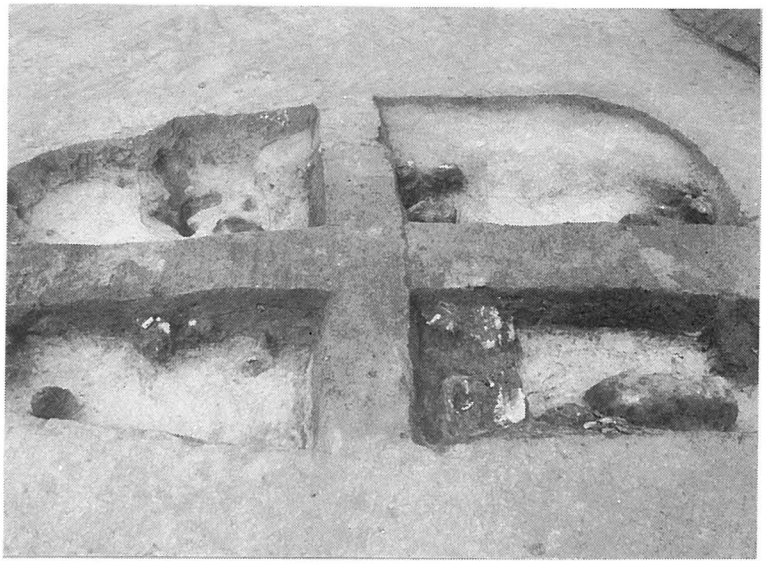
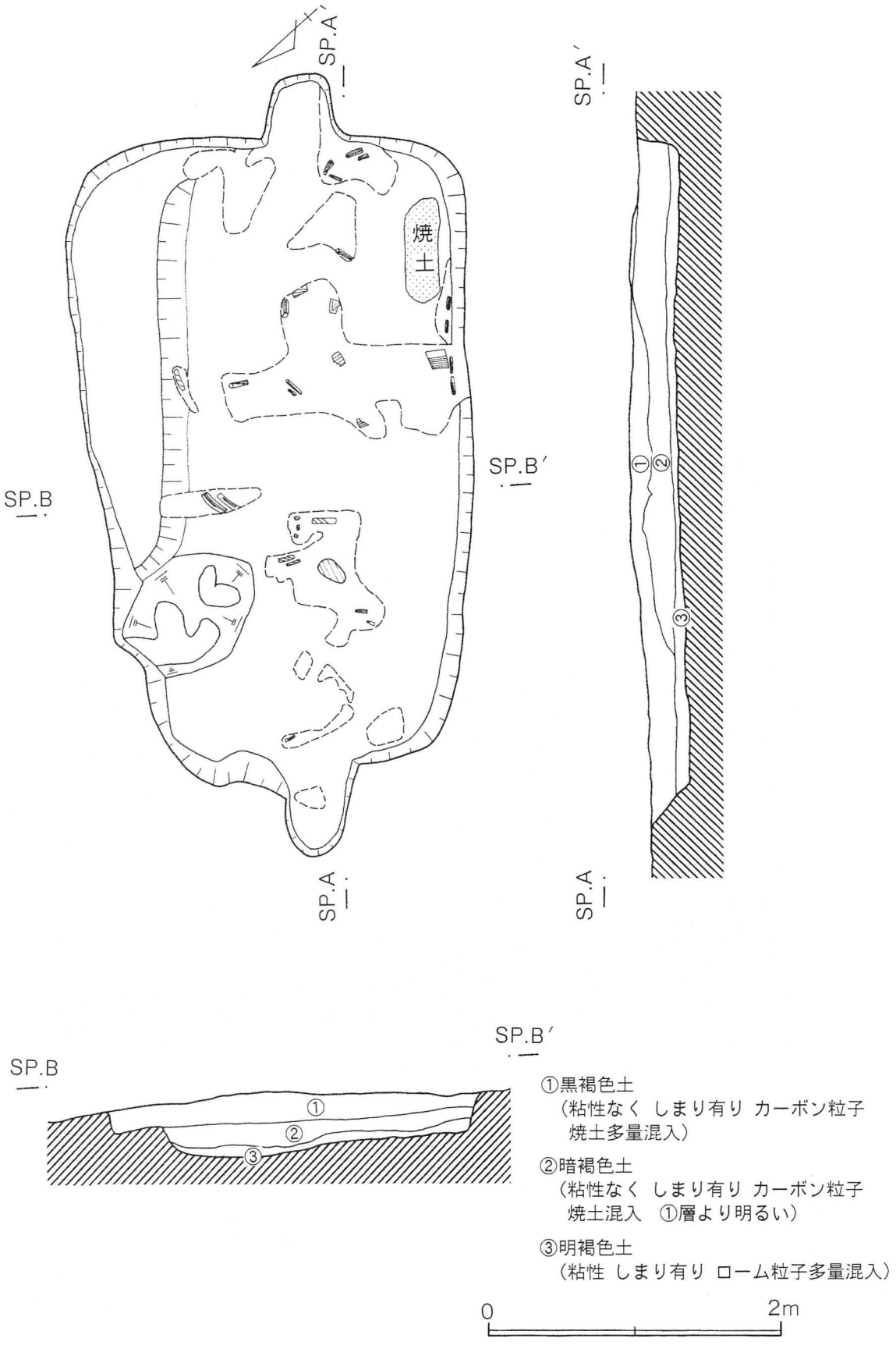


写真12　第1号炭焼窯跡　土層断面

写真13　第1号炭焼窯跡　炭化材出土状態



第６図　第１号炭焼窯跡　平面および断面図

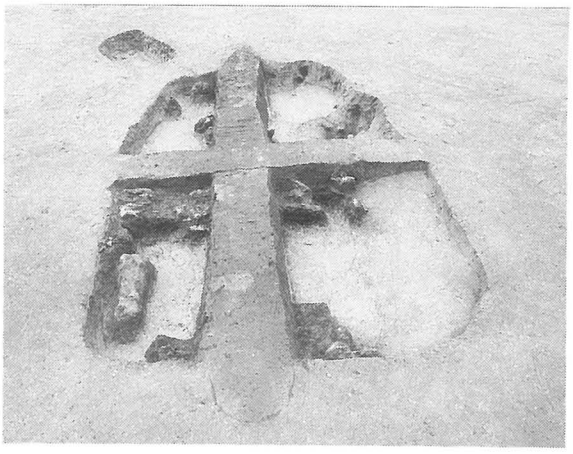


写真14　調査風景

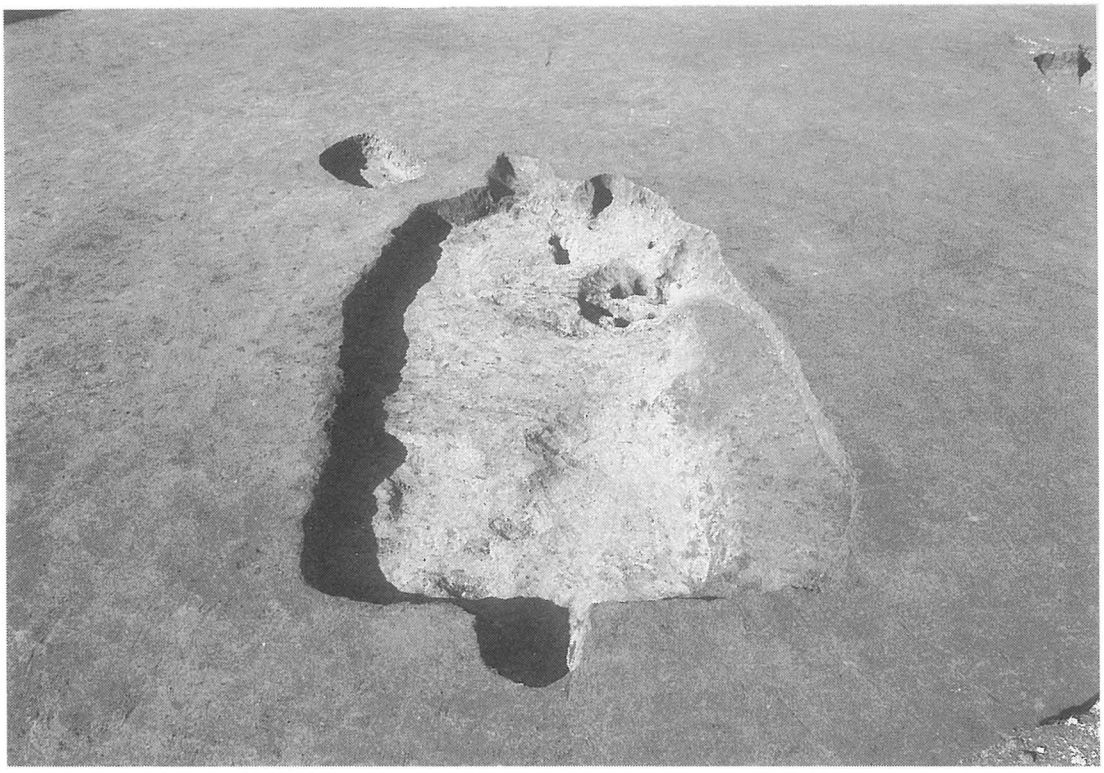


写真15　第1号炭焼窯跡　完掘状態

2）第２号炭焼窯跡

第２号炭焼窯跡は、本調査区の西区中央南側で確認された。

大半は調査区の南側に延びている。

確認面は表土下である。確認時の平面形は角丸の長方形を示すものと考えられた。

規模は、北壁では465cm、確認面からの深さは最深部で55cmを計る。

平面形は大半が調査区外に延びていることから、不明であるが角丸の長方形もしくは角の張る小判型を呈するものと考えられる。

第１号炭焼窯同様、北側に110cm×100cmの楕円形の張り出し部が付く。

主軸は大半が調査区外のため不明である。

床はロームでほぼ平らで、踏み固められた痕跡はない。

北側突出部の基部に50cm×40cm、深さ7cmほどの不定形の掘り込みが見られる。

壁はやや広がって立ち上がる。

覆土は、大きく６層に分けられる。

第①層：茶褐色土

第②層：暗褐色土でカーボン粒子をごく少量混入。

第③層：明茶褐色土。

第④層：明褐色土でカーボン粒子を少量混入。

第⑤層：黒褐色土でカーボン粒子を大量に混入する。

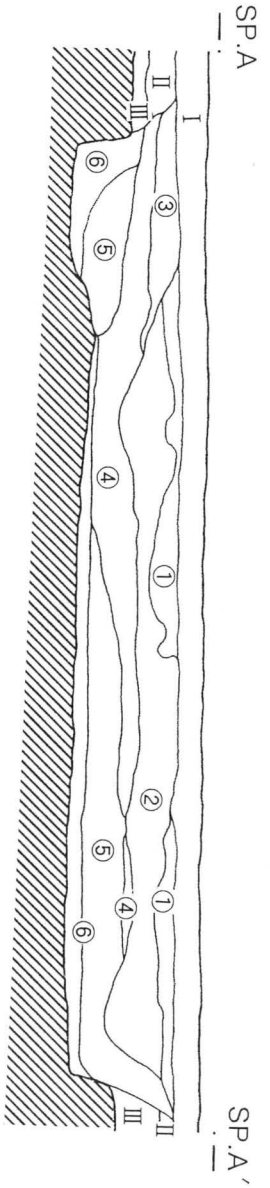
第⑥層：明褐色土で、ローム粒子を多量に含み、カーボン粒子を少量混入する。

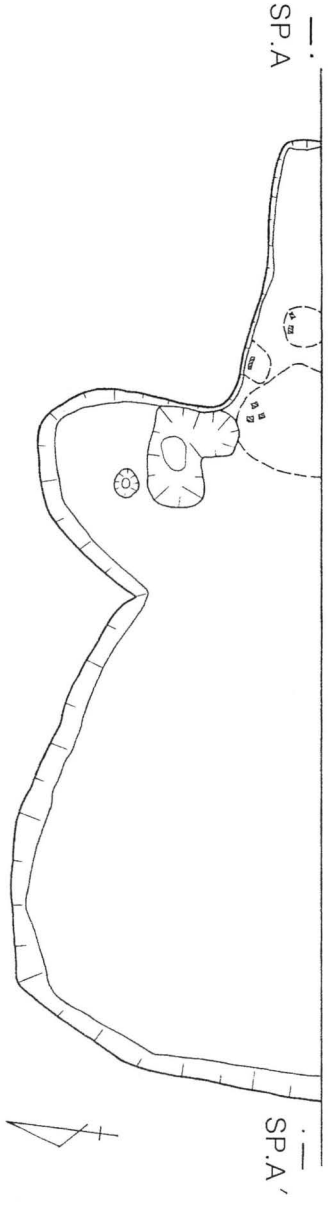
出土遺物はないが、炭化材の小破片が突出部の周辺に集中して確認された。

風向きを考慮すると、北側の突出部は焚口と考えて良いであろう。

写真16　第２号炭焼窯跡　土層断面

写真17　第２号炭焼窯跡　遺構確認状態





Ⅰ 茶褐色土
Ⅱ 暗褐色土
Ⅲ 明褐色土

①茶褐色土（粘性 しまり有り）
②暗褐色土（粘性なし しまり有り カーボン少量混入）
③明茶褐色土（粘性 しまり有り）
④明茶褐色土（粘性 しまり有り カーボン少量混入）
⑤黒色土（粘性 しまり有り カーボン多量混入）
⑥明褐色土（粘性 しまり有り ローム粒子多量混入）

第７図　第２号炭焼窯跡　平面および断面図

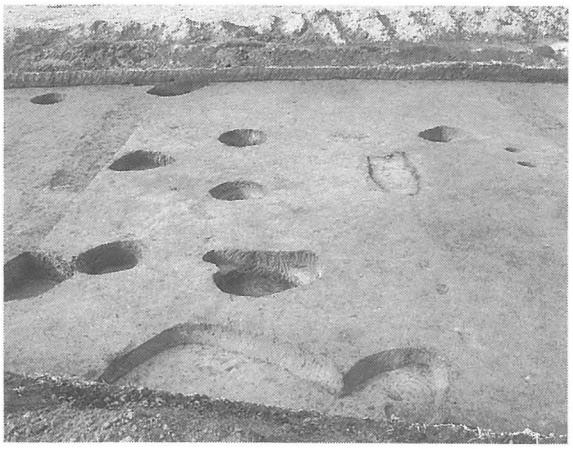


写真18　調査風景

写真19　第２号炭焼窯跡　完掘状態

3）抜根穴跡

土坑は、調査区全体で検出された。

検出数は全体で64基にのぼる。

確認調査において、確認をおこなった際には、これらの土坑は炭焼窯に伴う工房跡などを予想させた。

調査区の表土を排除してみると、分布は本調査区の東区より西区の方に多くある傾向を示すが、大きな偏りはなかった。

確認面はいずれも表土直下である。

平面形は円形、楕円形、不正形と一律ではない。

各土坑について、調査を行っていくと、その平面形は円形や楕円形であっても、坑底では二股や三股、と多股に分かれ、複雑な様相を呈した。また、その覆土には、ロームブロックを含むものも多く、一部は、坑底に腰した樹木が確認されたものもあった。

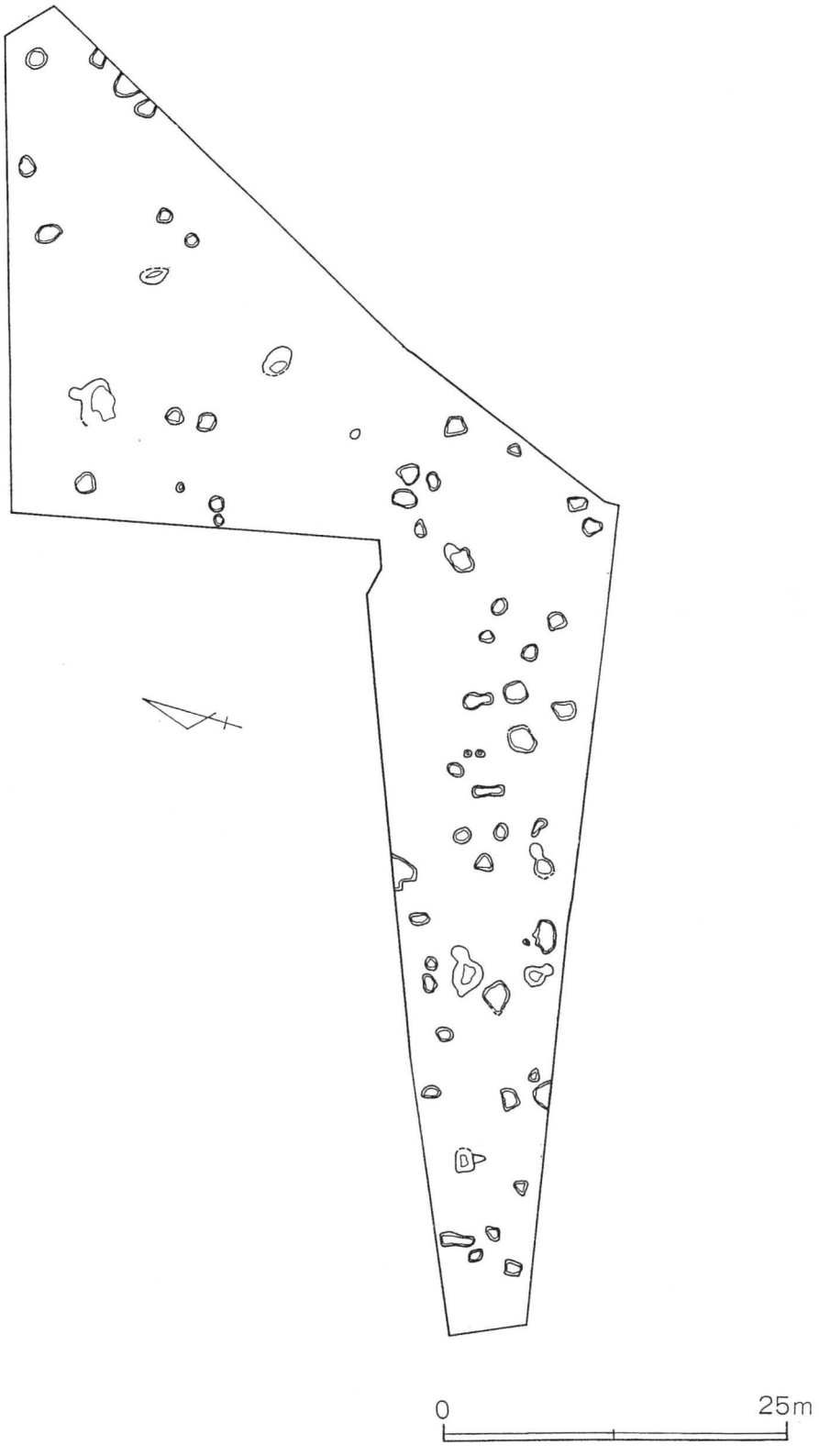
こうした状況が見られたため、土坑については、開墾時に周辺に生えていた樹木や、切り株などを排除した「穴」と判断した。

調査は、完掘するとともに、平面状態だけを記録するものとした。

しかしながら、調査終了後になって、炭の原料になる雑木等については、炭焼窯周辺に生育する樹木などを使う可能性が高いことを考え、こうした抜根穴については、開墾時のものであれ、炭焼窯に何らかの関係を持つものである可能性もあることから、報告書ではその平面配置図を掲載しておくものとした。

写真20　抜根穴跡①

写真21　抜根穴跡②



第８図　抜根穴跡配置図

第２節　出土遺物

次に、本遺跡で出土した遺物について報告することとする。

本遺跡で出土した遺物には、土器と石器、炭化材がある。それぞれについて説明するものとする。

今回取り上げた遺物は、土器39点、石器６点、炭化材２点である。

土器と石器については、遺構に伴って出土したものでは無く、炭化材は第１号炭焼窯跡出土である。

1）土器

土器は、遺構に伴って出土したものでは無かった。ここでは、調査区域の中から出土したものを全体としてとりあげた。土器には縄文土器と土師器がある。

１は、深鉢の口縁から頸部にかけての一括個体である。16片の土器片からなる個体で、残存率は約10％である。

口径31cm、現高14.6cm、器厚は口唇部で2.6cm、頸部で1.3cmを計る。

器形は、口縁部は、幾分内湾しながら外側に反る。頸部は緩やかにくびれ、肩部に向かって開き、胴部に続くものと思われ、最大径は胴部上半にあると考えられる。

文様は、口唇部はほぼ平らで、口縁部は太い隆帯によって６区画に区画され、それぞれに瘤状の把手が付く。口縁部から頸部にかけては無文。頸部に４段の紐状の隆帯を回す。全体には地文は無い。

焼成は良好、色調は灰黄茶褐色、焼成により部分的に黒くなっている。胎土は比較的荒く、小砂を含む。

２は、縄文土器深鉢口縁の破片。口唇部は厚く、内側は段を有して外反する。器厚は口唇部で1.5cm、段を有する部分で1.9cm、下部で1.2cmを計る。色調は灰茶褐色で焼成良好であるが、表面は荒れており、胎土に小砂を多量に含む。

３は、縄文土器深鉢口縁の破片。口唇部は厚く、内側は段を有して外反する。器厚は口唇部で1.6cm、段を有する部分で1.9cm、下部で1.3cmを計る。色調は灰茶褐色、焼成良好であるが、表裏面とも荒れ、胎土に小砂を含む。

２～３は同一個体と思われる。

４は、縄文土器深鉢口縁の破片。口唇部は厚く、内側は段を有して外反する。器厚は口唇部が剥落しているが1.3cm、段部1.9cm、下部は1.3cmを計る。色調は灰茶褐色、焼成良好、器面は荒れ、小砂を含む。

４も２～３と同一個体であるかもしれない。

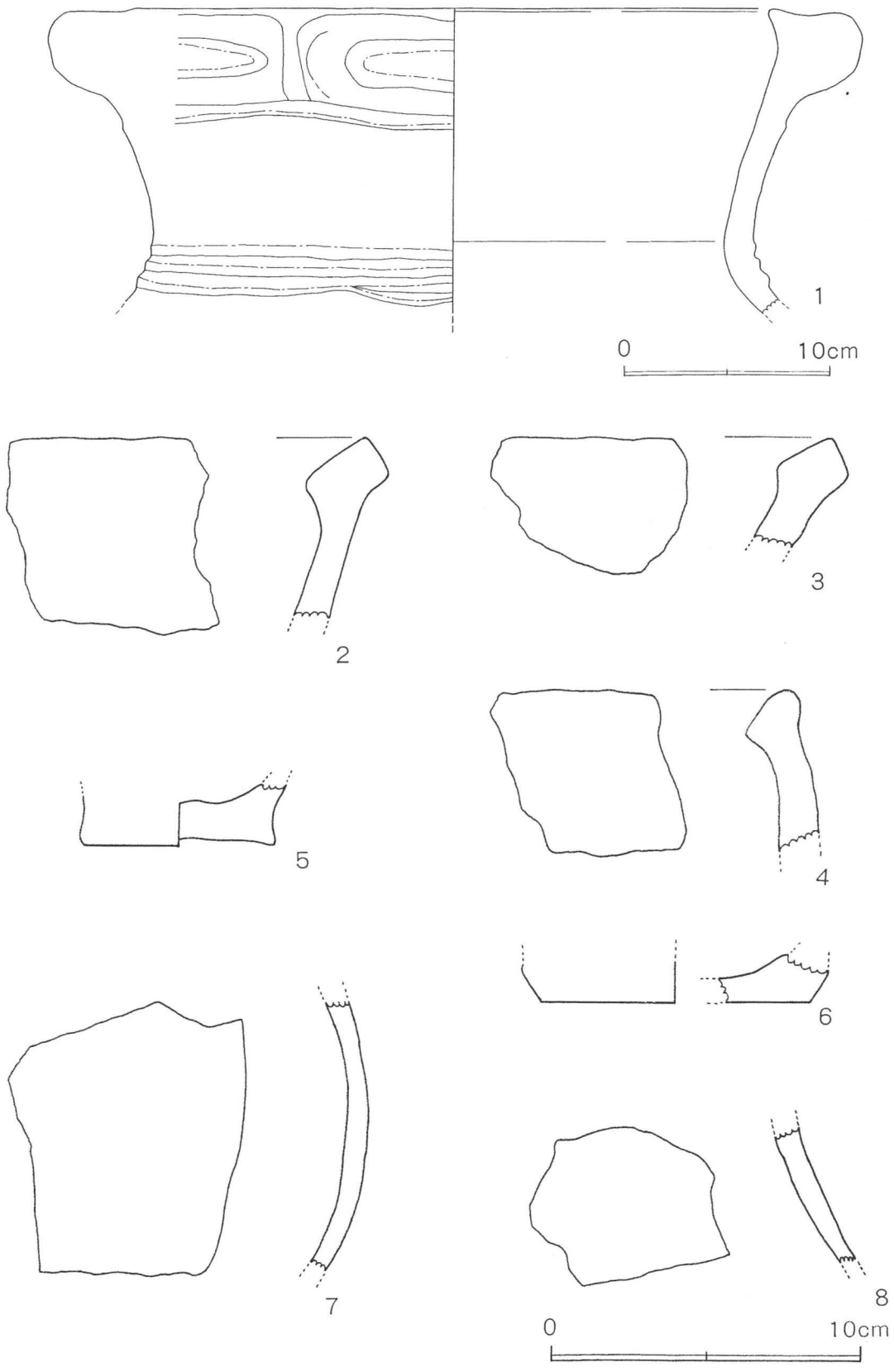
５は、縄文土器深鉢底部。底径6.0、現高2.0cm、底厚は1.6cmを計る。底部は全部残存している。底部からゆっくり広がり立ち上がり胴部に至るものと思われる。底はやや上底になっている。色調は茶褐色、焼成は良好、器面は荒れている。胎土に小砂と繊維を大量に含む。

６は、縄文土器深鉢底部。底直径8.6cm、現高1.5cmを計る。底部の半分ほどの残存。底は平らである。色調は明灰褐色、焼成良好、胎土に小砂を含む。

７は、土師器甕胴部破片と思われる。器厚は0.7cmを計る。色調は茶褐色。焼成は良好、胎土には小砂が混じる。表面はヘラ磨き、内部はヘラ削りの調整が見られる。

８は、土師器台付甕の脚部破片と思われる。器厚は上部が1.0cm、下部が0.6cmを計る。色調は明茶褐色。焼成良好、胎土には白色の小砂が混じる。表面はきれいに磨かれなめらかである。

９は、縄文土器深鉢口縁破片。口縁部は大きく外湾し、口縁部直下に隆帯、その下に半裁竹による刺突が見られる。器厚は1.0cm、焼成良好、色調は灰黄褐色。小砂混入。



第９図　出土遺物実測図

10は、縄文土器深鉢口縁破片。文様は付加条の縄文。器厚1.0cm、焼成良好、褐色、繊維を含む。

11は、縄文土器深鉢口縁破片。2片接合。口縁は外湾、頸部以下の地文は疑似縄文、肩部に沈線を廻す。器厚1.0cm、焼成良好、褐色、小砂混入。

12は、縄文土器深鉢口縁から胴部にかけての破片。小型のキャリパー型。口唇部は折返して隆帯状。口縁下に隆帯を貼付け、内部には沈線を施す。地文は縄文。器厚1.0cm、焼成良好、灰茶褐色、小砂混入。

13は、縄文土器深鉢口縁破片。小型のキャリパー型。口唇部は折返して整形。丸型の小突起が付く。地文は縄文。口縁部下端に二条の隆帯。器厚0.9cm、焼成良好、灰褐色、小砂混入。

14は、縄文土器胴部破片。4片接合。羽状縄文を施す。器厚0.8cm、焼成良好だがもろい。繊維混入。内側に黒い付着物。

15は、縄文土器深鉢胴部破片。2片接合。磨消縄文が見られる。器厚0.7cm、焼成良好、色調、表面は灰茶褐色、内面黒褐色。小砂混入。内面は良く磨かれている。

16は、縄文土器深鉢の胴部破片。文様は磨消縄文。器厚0.7cm。焼成良好。色調は茶褐色。本破片は、確認調査時に報告済み。(館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第39集P19 出土遺物1)

17は、縄文土器深鉢胴部破片。地文は斜縄文。上部に波状の太い沈線が見られる。器厚0.9cm、焼成良好。色調は茶褐色。小砂、金雲母混入。内面は荒れている。

18は、縄文土器深鉢胴部破片。地文は斜縄文。上部に波状の太い沈線が施される。器厚1.0cm、焼成良好。色調は茶褐色。小砂、金雲母混入。内面は荒れる。17と同一個体か？

19は、縄文土器深鉢胴部破片。文様は磨消縄文。器厚0.6cm。焼成良好。色調は茶褐色。本破片は、確認調査時に報告済み。(館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第39集P19 出土土器2)

20は、縄文土器深鉢胴部破片。地文は斜縄文。上部に波状の太い沈線が施される。器厚1.1cm、焼成良好。色調は茶褐色。小砂、金雲母混入。内面は荒れる。18と同一個体で接合する。

21は、縄文土器深鉢胴部小破片。磨消縄文。器厚1.2cm、焼成良好。色調は茶褐色。小砂混入。

22は、縄文土器深鉢胴部破片。直線的な沈線での区画が見られる。沈線の先は二つに割れている。器厚1.1cm、焼成は良好であるが、内面は荒れている。色調は表面灰褐色。内面は風化し黒くなっている。

23は、縄文土器深鉢胴部破片である。文様は中央部に太い沈線が見られる。器厚1.6cm、焼成は良好であるが、内面は荒れている。色調は灰褐色、小砂を多く含む。

24は、縄文土器深鉢胴部破片。太い沈線が2本見られる。器厚1.2cm、焼成は良好であるが裏面は荒れている。色調は灰褐色、小砂を含む。

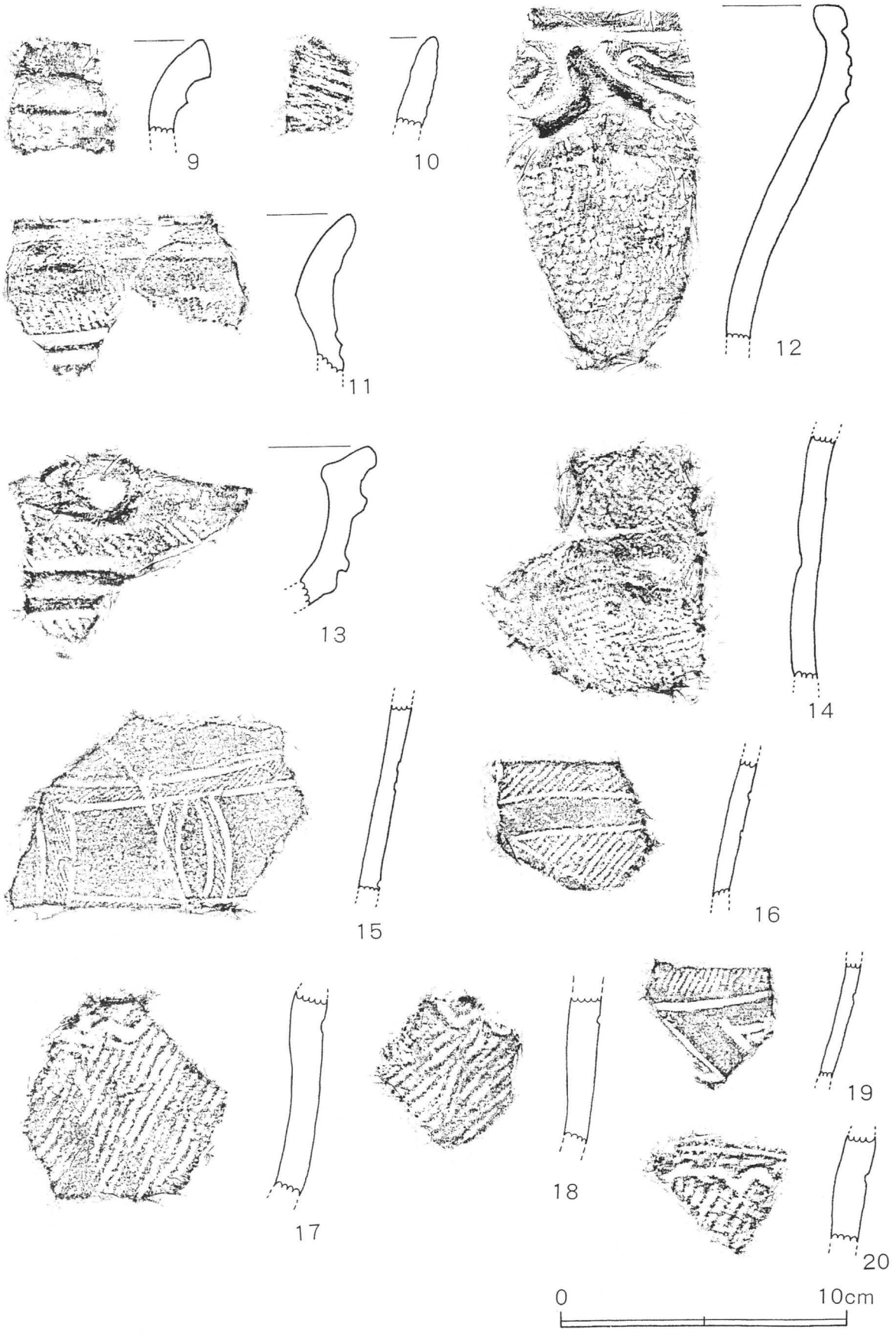
25は、縄文土器深鉢胴部破片。文様は見られない。底部に近い破片と思われる。器厚1.1cm、焼成良好、色調は明褐色。小砂を含む。

26は、縄文土器深鉢頸部破片。紐状の隆帯を廻す。器厚1.3cm、焼成良好。色調は灰黄褐色。胎土は比較的荒く、小砂を含む。1と同一個体であるかもしれない。

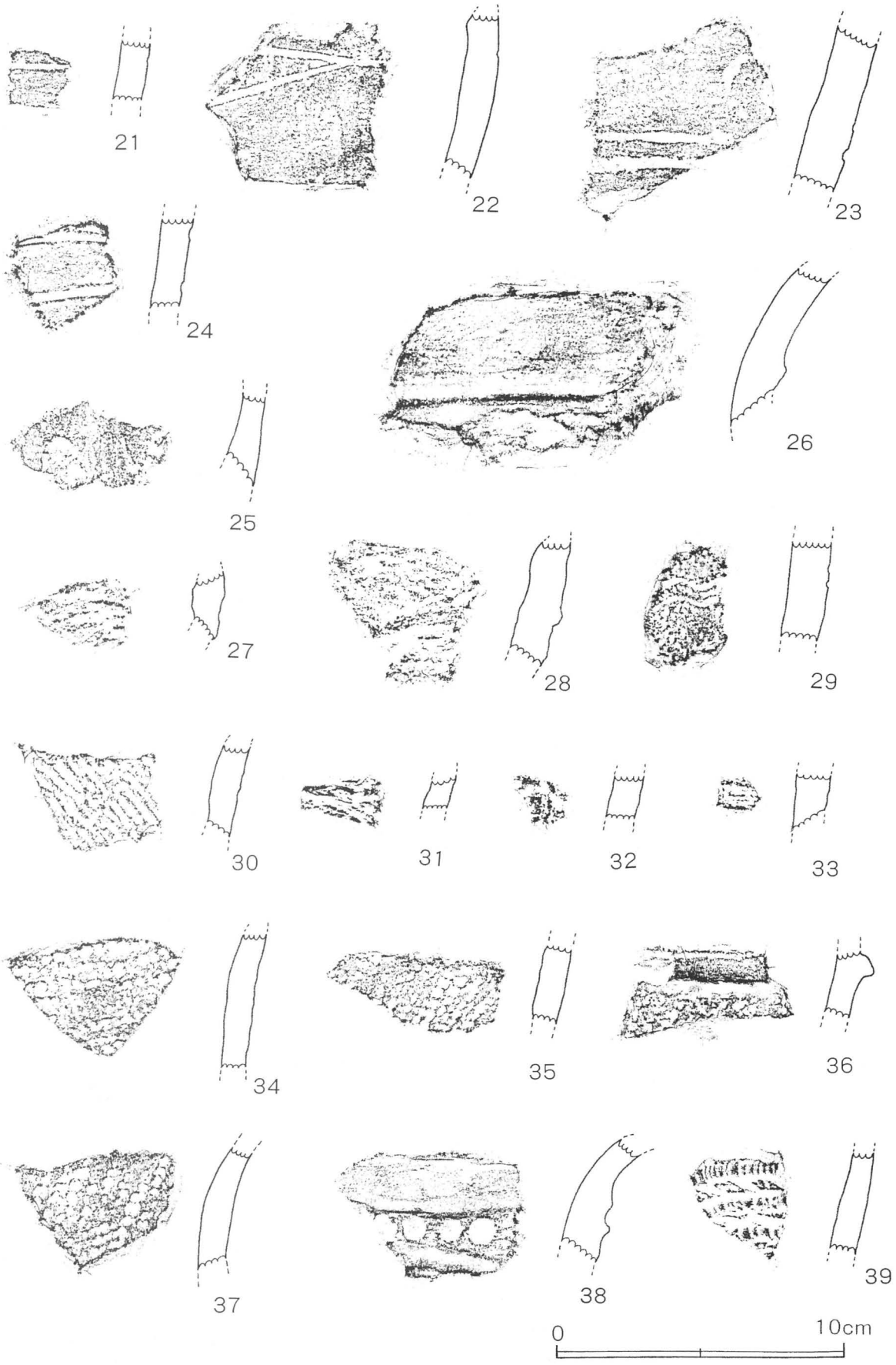
27は、縄文土器深鉢胴部小破片。付加条の縄文が見られる。器厚1.2cm、焼成はあまり良くない。茶褐色を呈し繊維を含む。

28は、縄文土器深鉢胴部破片。表面に付加条の縄文が見られる。器厚1.1cm、焼成はあまり良くない。他褐色を呈し繊維を多量に含む。

29は、縄文土器深鉢胴部破片。表面に斜縄文の地文、波型の2本の沈線が見られる。器厚1.4cm。



第10図　出土遺物　実測図及び拓影(1)



第11図　出土遺物　実測図及び拓影(2)

茶褐色を呈し、小砂、雲母混入。

30は、縄文土器深鉢胴部破片。表面に斜縄文が見られる。器厚1.2cm、色調は灰黄褐色、胎土は比較的荒く小砂を含む。1の胴部破片である可能性が高い。

31は、縄文土器深鉢胴部小破片。表面に付加条の縄文。器厚1.0cm、茶褐色を呈し、焼成は余りよくない。胎土に繊維を含む。

32、縄文土器深鉢胴部小破片。表面に斜縄文と絡条体状の刺突が見られる。器厚は、32が1.2cm、色調は茶褐色。焼成はあまり良くない。繊維を含む。

33は、縄文土器深鉢胴部小破片。付加条の縄文が施される。器厚1.6cm、色調は茶褐色。焼成はあまり良くない。繊維を含む。

34は、縄文土器深鉢胴部破片。斜縄文を施す。器厚1.1cm、焼成良好。色調は灰黄褐色。胎土は、比較的荒い。小砂混入。

35は、縄文土器深鉢胴部破片。斜縄文を施す。器厚1.1cm、焼成良好。色調は灰黄褐色。胎土は、比較的荒い。小砂混入。

36は、縄文土器深鉢胴部破片。上部に粘土紐貼付けの隆帯が見られ、地文は斜縄文。器厚1.1cm、焼成良好。色調は灰黄褐色。胎土は、比較的荒い。小砂混入。

37は、縄文土器深鉢胴部破片。斜縄文を施す。器厚1.2cm、焼成良好。色調は灰黄褐色。胎土は、比較的荒い。小砂混入。

34～37は、1の胴部破片と考えられる。

38は、縄文土器頸部破片。中央に太い粘土紐の隆帯がみられ、そこに丸い穴を刺突している。器厚1.0cm。焼成良好。色調灰明褐色。小砂混入。

39は、縄文土器深鉢胴部破片。半裁竹管による爪型の文様がみられる。器厚1.1cm、焼成良好。色調は茶褐色。小砂を混入する。

5、10、14、27、28、31、32、33は縄文時代前期の土器群と考えられる。

1～4、6、9、11～13、17、18、20～26、29、30、34～39は縄文時代中期の土器群と考えられる。

15、16、19、は縄文時代後期の土器群である。

7、8は古墳時代の土師器である。

2）石器

ここでは、6点の石器を取り上げた。いづれも遺構には伴わない。

1は、凹石である。

きめの粗い安山岩質の円礫を使用し、表裏面ともよく磨かれて小判状になっている。

表裏面ともに中央に凹みを1個有する。側面周囲はよく敲いた痕跡が見られ、中央部は凹んでいる。

2は、磨石。

比較的きめの細かい砂岩質の円礫の周囲が良く磨かれている。

両頂端には敲いた痕も見られる。

3は、磨り石もしくは石皿等の破片である。

きめの粗い安山岩質の円礫が良き磨かれている。一部に凹みがみられる。

4は、スクレイパーである。

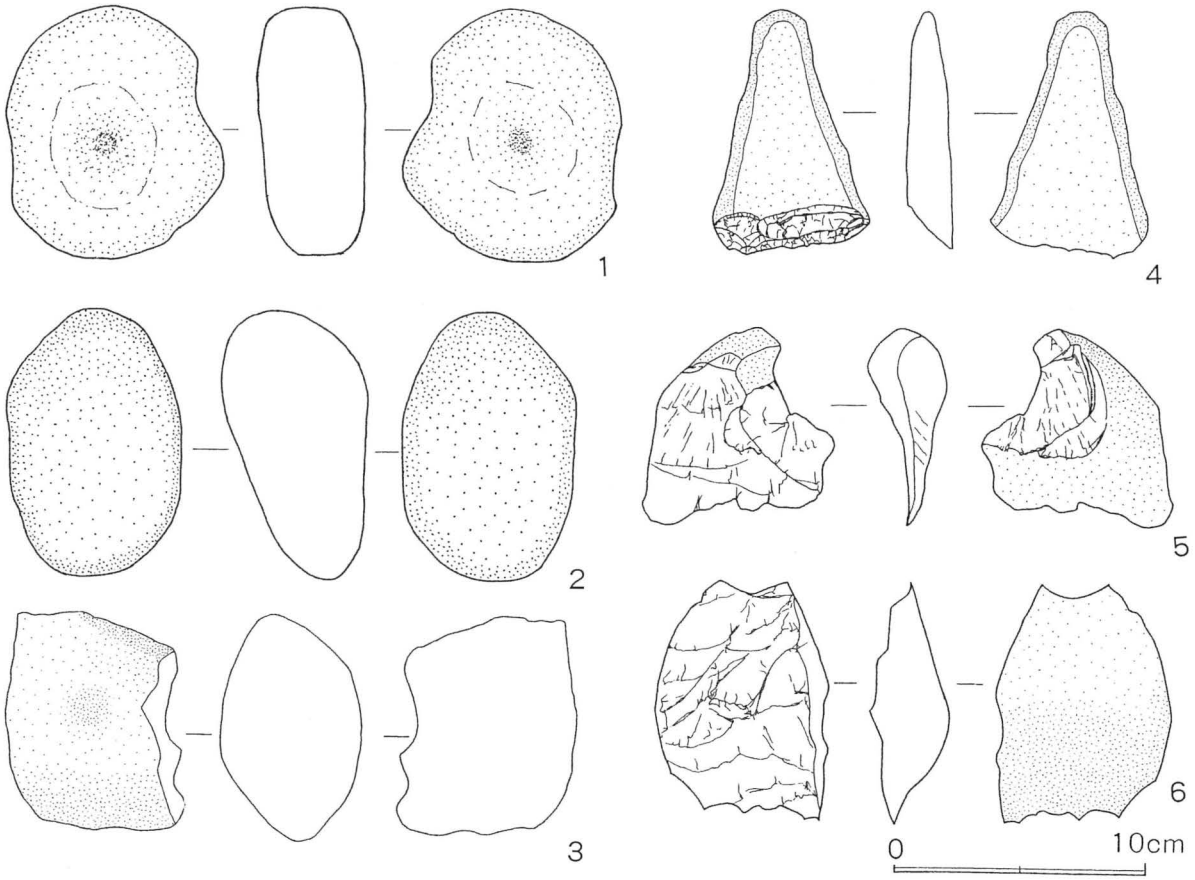
自然面を残す三角形のチャートの一部ゐ裏面から調整している。

5は、フレイクである。

砂岩質の比較的大きな円礫から打ち出されている。裏面に母岩の自然面を残す。

6もフレイクである。

チャートの比較的大きな円礫から打ち出されている。裏面はすべて母岩の自然面である。



第12図　石器実測図

3）炭化材

第1号炭焼窯跡から出土した6点（資料①～⑥）の炭化材の樹種同定と1点のC14の年代測定の分析を行った。分析は、㈱古環境研究所にお願いをした。

分析に使った資料の出土位置は、第1号炭焼窯跡のほぼ中央部、やや焚口寄り、中央、煙出寄りそれぞれ2点づつである。

同定の方法については、資料を分割して、炭化材の新鮮な横断面、放射断面、接線断面の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察し、解剖学的形質および現生標本との対比を行った。

次に同定結果について、㈱古環境研究所の報告書から抜粋し記す。

資料1：コナラ属クヌギ節　　資料2：コナラ属クヌギ節

資料3：コナラ属クヌギ節　　資料4：コナラ属クヌギ節

資料5：コナラ属クヌギ節　　資料6：コナラ属クブギ節

コナラ属クヌギ節

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列す環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定された。

コナラ属クヌギ節には、クヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。

落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

今回の樹種同定の結果では、第1号炭焼窯跡から出土した炭化材は、いずれもコナラ属クヌギ節に同定されており、すべて同一樹種である。

本炭焼窯では、クヌギあるいはアベマキの炭を焼いていたことになる。

また、他の炭焼窯の炭化材については同定を行っていないが、周辺では、クヌギあるいはアベマキを薪炭材として管理していた可能性が示唆された。

なおこの内の1点についてC14年代測定を行ったが、その結果については、1300±60年BP.と測定された。

暦年代でAD660～780年の年代値が得られたことになる。

第３節　松沼町遺跡の性格

ここで、今回の群馬県教育委員会と館林市教育委員会の確認調査の結果と本発掘調査の結果を整理するとともに、松沼町遺跡の性格について考えてみたい。

まず遺跡の立地について考えてみたい。本遺跡は沼を北西側に望む馬背状の台地である「埋設河畔砂丘」の北西斜面の中腹に立地している。遺跡地と埋設河畔砂丘トップとの比高差は4mほどあり北西から吹く風は「沼」を渡り砂丘のトップに向けて吹き上げる状態となる。

周囲は現在「赤松林」になっており、下草などは人間によって手が入れられ管理されているが、人手の入らない部分については、雑木林状になっている。

次に発見された遺構などについて考えてみたい。確認調査や本調査よって検出した主な遺構は炭焼窯跡と土坑である。炭焼窯跡は、確認調査で確認されたものが12基、本発掘調査によって検出したものが2基あり、現在まで14基の炭焼窯跡が検出されている。確認調査が部分的なもの（市教育委員で間隔が10m毎）であることを考慮すると、遺跡全体にはまだ数基の炭焼窯が存在することが予想できる。

土坑について考えてみると、確認調査では遺跡全体に多くの土坑が確認されている。また、本発掘調査の区域では67基の土坑が検出されている。本調査ではこれらの多くが後世の開墾に伴う根の抜き取り穴（抜根穴）と判断した。しかしながら、こうした根の抜き取り穴の数が膨大であることを考えると、遺跡内に多くの樹木があったことが考えられ、炭の原料として利用されてきたのではないかとの想像もふくらませた。

次に遺跡内での群在する炭焼窯跡の構造と遺跡内での配置状況について考えて見たい。

本発掘調査で検出された第1号炭焼窯跡の形は、角の張った長い小判型を呈し、長軸方向（北西～南東）に楕円の突出部が付く形態を示す。長軸方向は谷に並行する方向である。

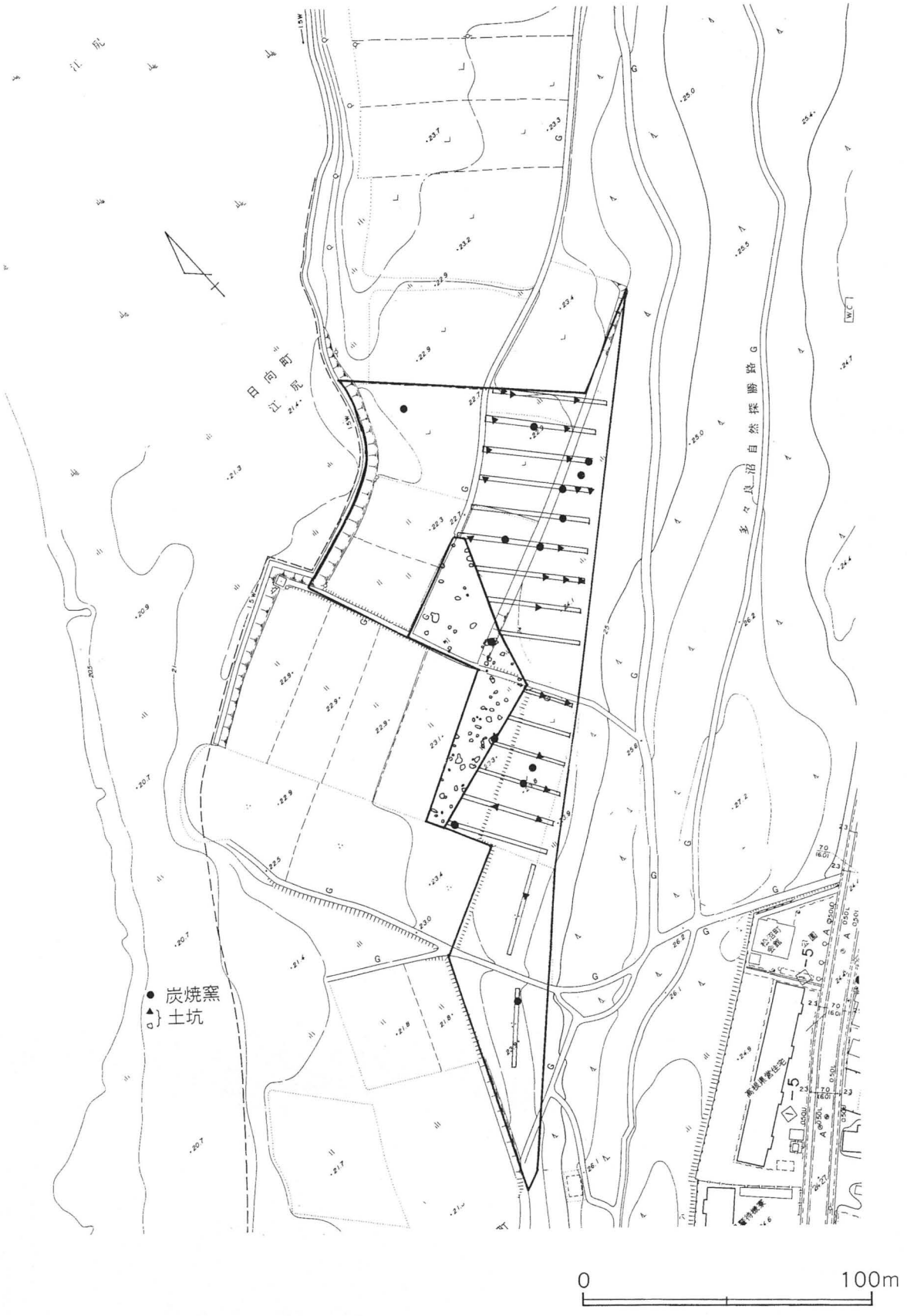
現在の館林市では冬場は北西の方向から風の吹く日が多い。いわゆる「赤城おろし」と呼ばれる風であり、ちょうど谷下が風上となる状況と一致する。

炭焼きの季節は一般的に秋から冬にかけてといわれ、おりしも赤城おろしが吹き始める季節と一致する。

本遺跡の炭焼窯がこうしたことを意識して作られた可能性は高い。

また、こうしたこの狭い範囲に炭焼窯が群在することや、沼を利用した運搬方法を考慮する時、多々良沼の北岸に位置する製鉄跡との関連性を無視することはできないであろうと考える。

写真22　多々良沼と松沼町遺跡



第１３図　松沼町遺跡全体遺構配置図

第４節　「製鉄」との関連性

最後に「蹈鞴製鉄」との関連性をまとめておきたい。

本遺跡の所在する地域は「多々良地区」と呼ばれている地域である。館林市域にあってはその北西の部分を占める地域で、地域の北側は矢場川を隔て栃木県足利市と、西側は「多々良沼」を隔てて邑楽郡邑楽町に接する地域である。

地域や沼の名称の「多々良」は「蹈鞴」に通ずる言葉とされ、地域の伝説によれば、平安時代の終わり頃の万寿２年（1025）「タカラヒナタ」なる者が、この沼の水が製鉄に適するとして、この地で製鉄を始め、その後「タカラヒナタ」の名前から「タタラ」と「ヒナタ」の地名が起こったとされる。

この時代の製鉄といえば「蹈鞴製鉄」である、多々良沼の水がはたして製鉄に適したかどうかは不明であるが、この地域で「蹈鞴製鉄」が行われていたことを示唆している。

ここで、多々良沼周辺の製鉄に関係するものをあげて見たい。

まず、沼の北岸に現在多々良沼漁港になっている周辺が「多々良沼遺跡」で製鉄生産址として遺跡台帳に搭載されている。

現在、実際漁港の桟橋となっている水面下で、大型の鉄滓を採取することができる。

また、近くには平安時代の遺物が採取できる「日向新田遺跡」が所在している。両遺跡とも発掘調査の例がないので、詳細は不明であるが、この付近が製鉄生産の中心地と考えられている。

また、確認はしていないが、地元の人の話のなかに、多々良沼に邑楽町側から突出する「浮島弁天」のあたりでも小さい鉄滓が採取できる場所があるとの話も伺っている。

また、時代は下るが、邑楽町指定文化財に、「鶉小城打ちの脇差」があり、「鶉小城」は遺跡分布図でもわかるとおり、邑楽町側の「浮島弁天」（沼に付き出す洪積台地）の基部の台地部分にあたる。こうしたことからも、この地域の「鍛冶」や「製鉄」との関連性は無視できない。

さて、製鉄の原料等がどのように供給されていたかということを考えてみたい。

製鉄の原料としては「砂鉄」と「炭」がその大半を占めるといわれている。

「砂鉄」について考えるならば、多々良沼東岸の「埋設河畔砂丘」の起源は、下末吉海進以前にさかのぼるとされ、河川堆積物である砂の上に、中部ロームと上部ロームを載せている。ローム下の砂層には鉄分が含まれていることは言うまでもない。

つまり、この地域においては「埋設河畔砂丘」を掘れば「砂鉄」を手に入れることができることになる。

次に「炭」の問題であるが、これまで、炭の供給地については推測の域をでなかった。

今回、本遺跡では、その時代は明確にできなかったが、「炭焼窯跡」が14基確認され、遺跡内には多くの

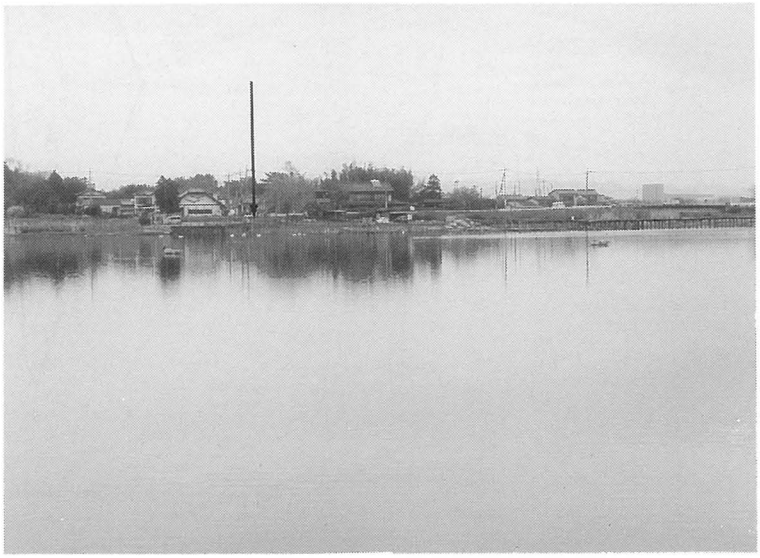
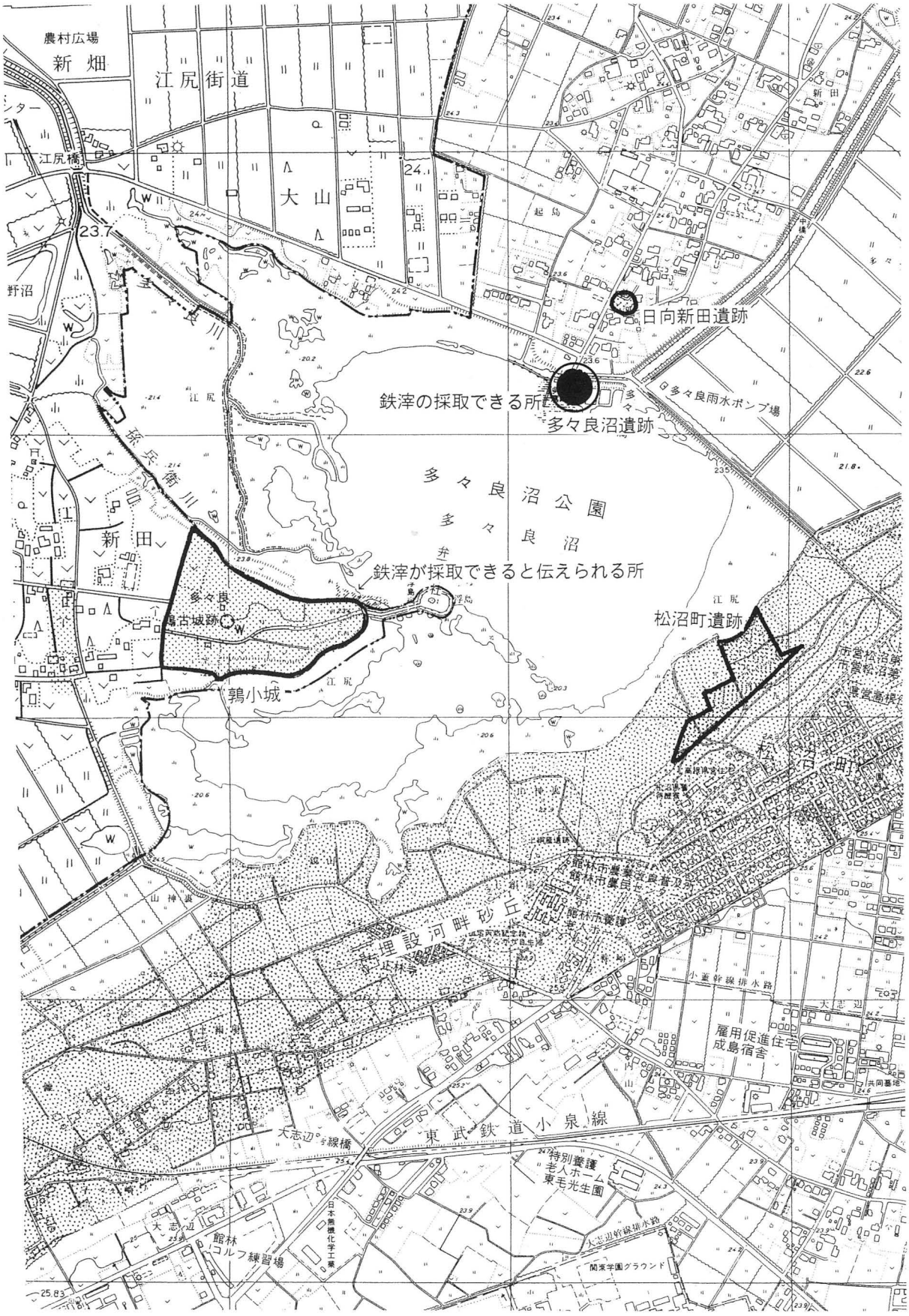


写真23　多々良沼遺跡近影



第１４図　周辺の製鉄関係の遺跡等

「炭焼窯」が群在することが確認された。

製鉄に必要な「炭」を、沼を隔てた馬背状の台地という地形や、そこに生える雑木、沼から吹き上げてくる風を利用して「生産」していたものと考えられる。

最後に沼との関わりを考えておきたい。

鉄生産（製鉄）の工程上で沼とのかかわりをみてみるならば、「砂鉄」を含んだ砂から砂鉄を分けるのには水が使われる。原料などの運搬については舟が使えることがあげられる。

特に、重量のある「砂鉄」や、大量の「炭」の運搬に舟を利用したことは想像に難くない。

このように「多々良沼」周辺は製鉄には適した地域であったといえよう。

写　真　図　版

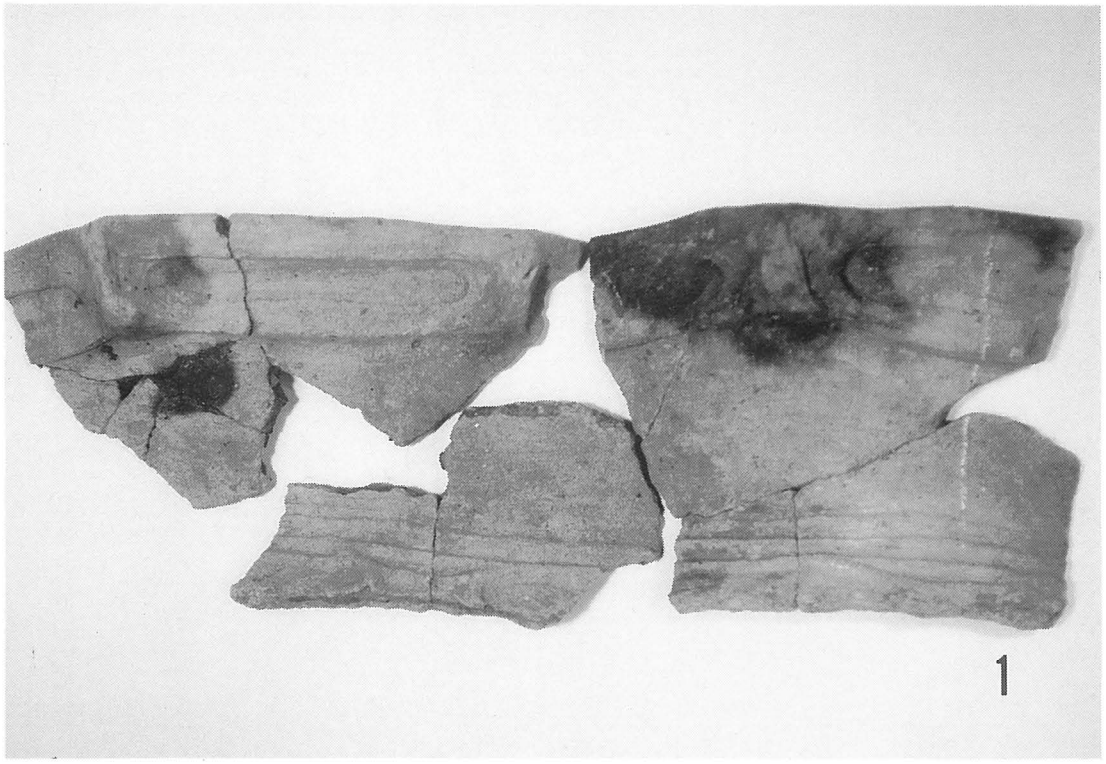


写真24　出土遺物①（No. 1）

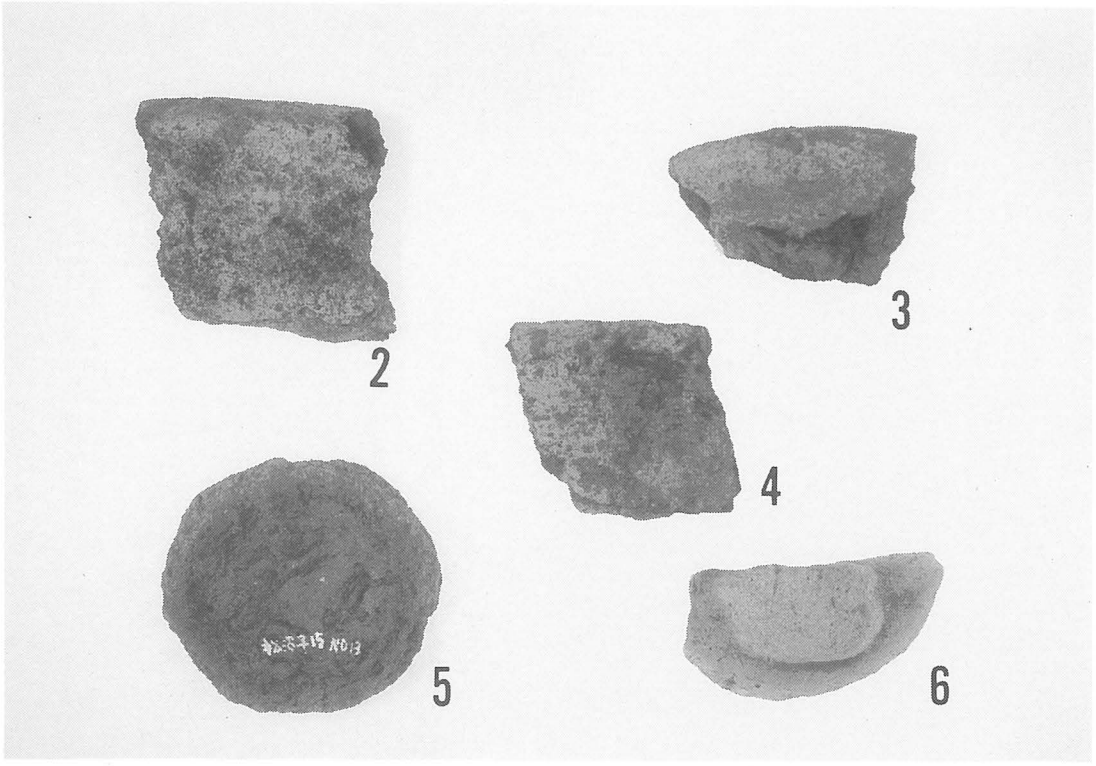


写真25　出土遺物②（No. 2～No. 6）

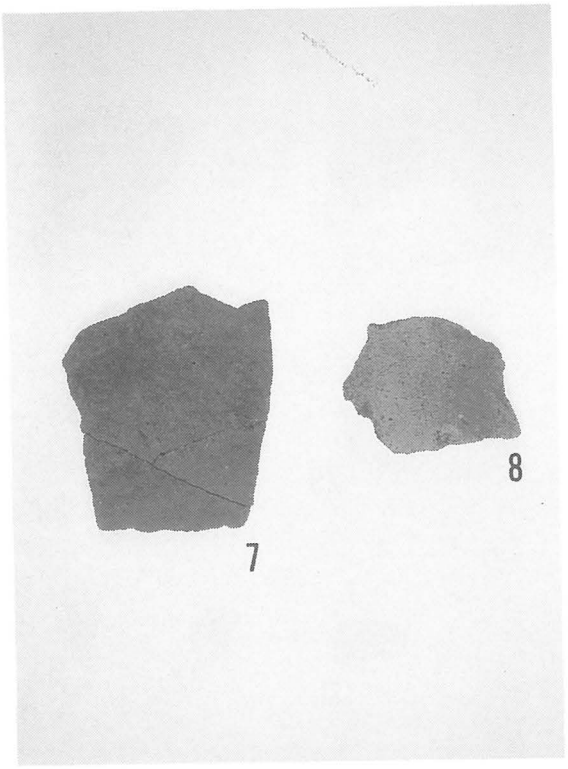


写真26　出土遺物③（No. 7～No. 8）

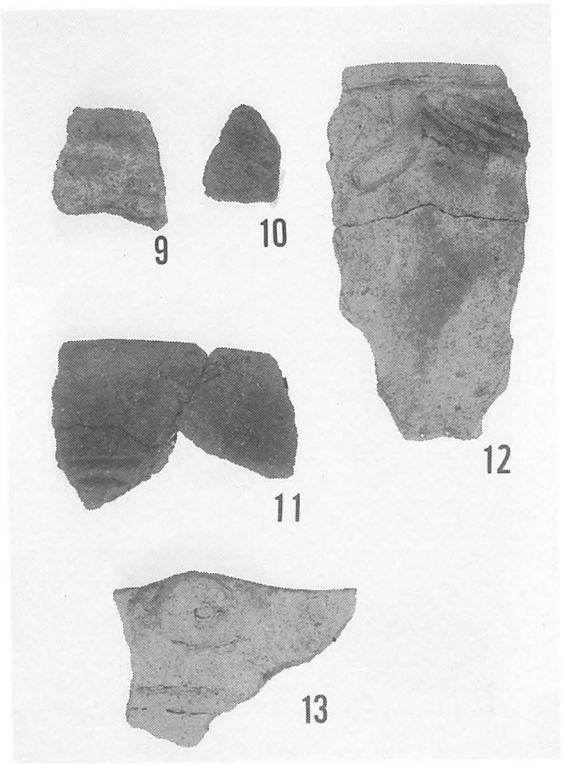


写真27　出土遺物④（No. 9～No. 13）

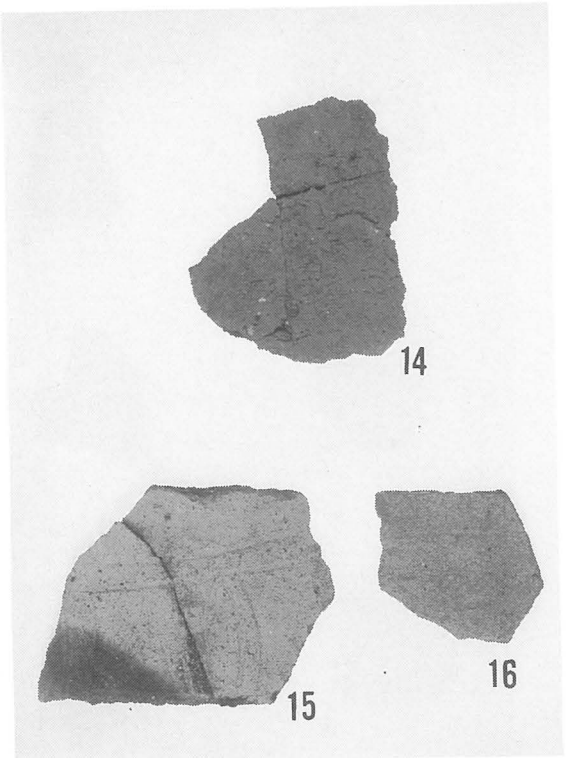


写真28　出土遺物⑤（No. 14～No. 16）

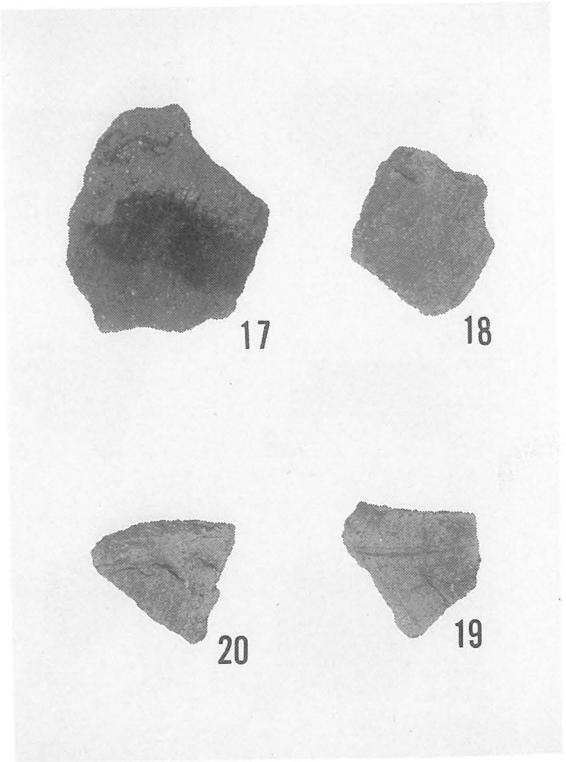


写真29　出土遺物⑥（No. 17～No. 20）

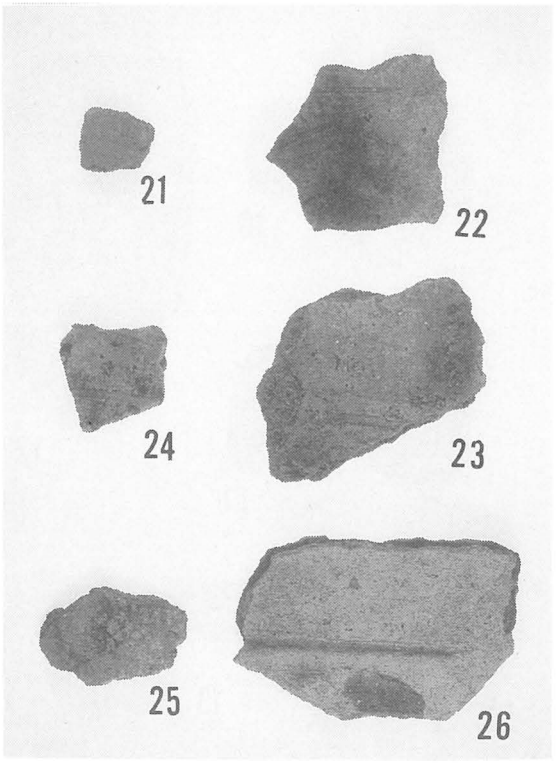


写真30　出土遺物⑦（No. 21～No. 26）

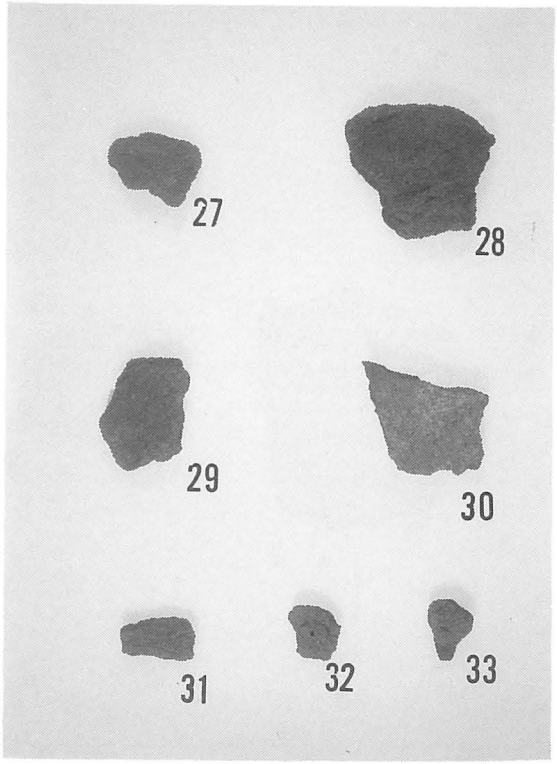


写真31　出土遺物⑧（No. 27～No. 33）

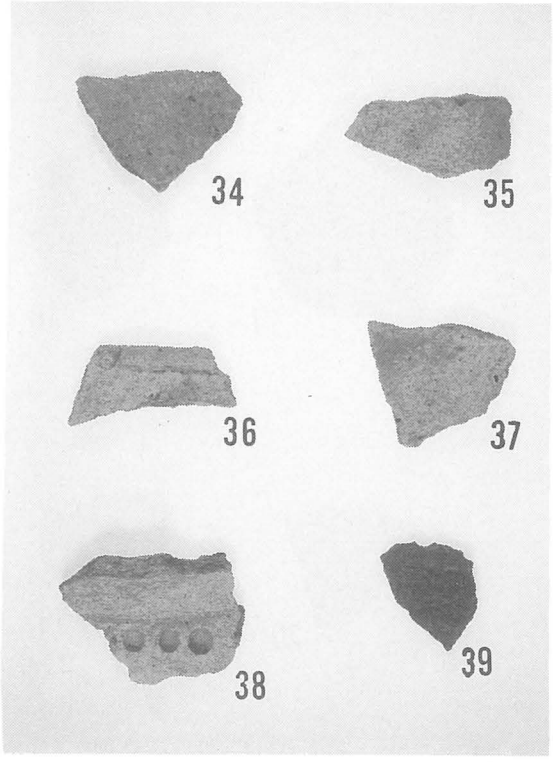


写真32　出土遺物⑨（No. 34～No. 39）

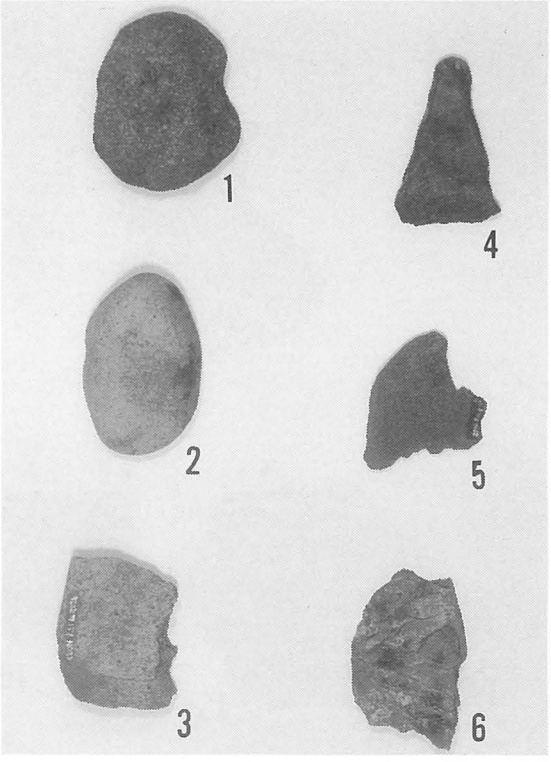
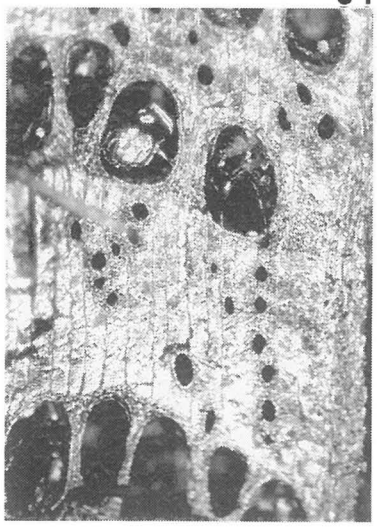


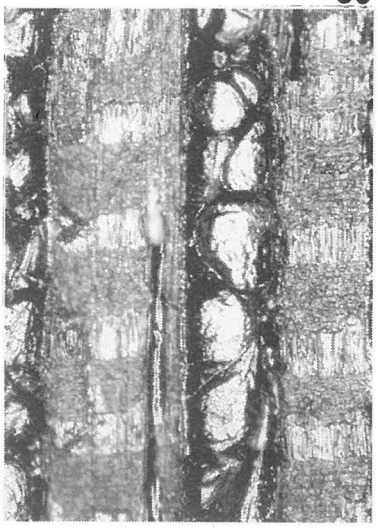
写真33　出土遺物⑩（石1～石6）

34



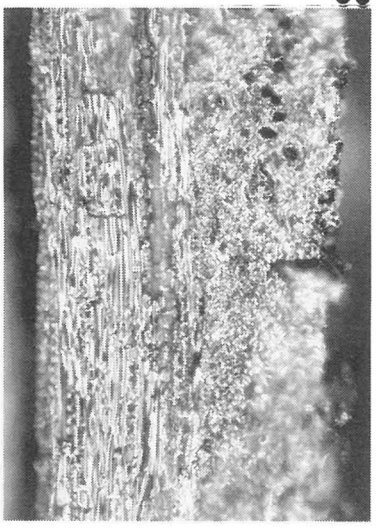
横断面 ━━━━ : 0.4mm

35



放射断面 ━━━━ : 0.4mm

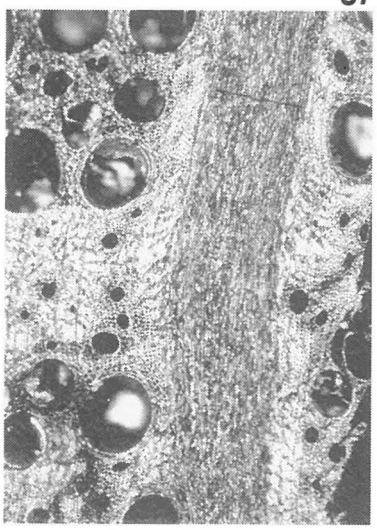
36



接線断面 ━━━━ : 0.2mm

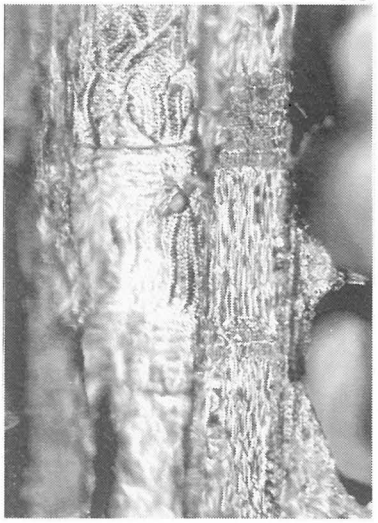
1．① 1-G コナラ属クヌギ節

37



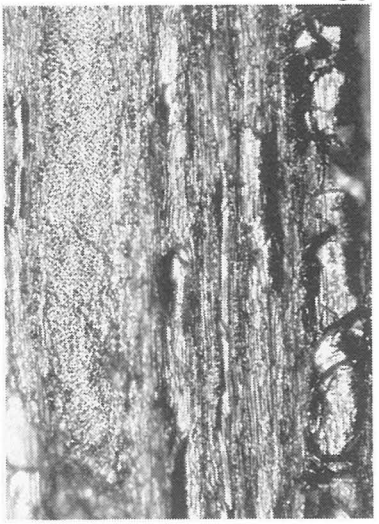
横断面 ━━━━ : 0.4mm

38



放射断面 ━━━━ : 0.2mm

39



接線断面 ━━━━ : 0.4mm

2．③ 1-K コナラ属クヌギ節

参 考 文 献

館林市教育委員会	「館林市埋蔵文化財発掘調査報告書」　第１集～第39集	
館林市教育委員会	「茂林寺沼および低地湿原調査報告書」 第２集	(1986)
館林市	「館林市誌　歴史編」	(1969)
館林市	「館林市誌　自然編」	(1966)
館林市立図書館	「館林双書」第１巻～第31巻	
群馬県	「群馬県史　資料編１　原始古代１　旧石器・縄文」	(1988)
群馬県	「群馬県史　資料編２　原始古代２　弥生・土師」	(1990)
群馬県林務部	「群馬県の貴重な自然・地形・地質編」	(1999)
群馬県教育委員会	「群馬県遺跡台帳　東毛編」	(1971)
館林市	「館林市史　特別編第１巻　館林とツツジ」	(2004)
群馬県教育委員会	「群馬県文化財情報システム」	(2002)
上毛新聞社	「群馬県遺跡大事典」	(1999)

抄　　録

ふりがな	まつぬまちょういせきはっくつちょうさほうこくしょ		
書名	松沼町遺跡発掘調査報告書		
副書名	――――――――	巻次	――――――――
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書	シリーズ番号	第41集
編集者名	岡屋英治	編集機関	館林市教育委員会
所在地	〒374－0018　群馬県館林市城町1－1		
発行年月日	西暦　2005年　3月31日		

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
松沼町	松沼町	10207	145	－	－	20031020 20040220	1,367㎡	公園整備

遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松沼町	生産址	縄文～中世	炭焼窯跡等	縄文土器片、磨石、 炭化材等	

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第41集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発　　行　　館林市教育委員会
印 刷 所　　オーラ印刷有限会社
発行年月日　　平成17年3月31日

文化財愛護シンボルマーク
故郷の文化と歴史をみなおそう